

# ルスティケッロ・ダ・ピーサ<sup>1</sup>



図V-1 ルスティケッロ像 (BNF fr.1463, f.1r, 部分)

## 0 はじめに

「ある日我らは娛しみに、  
恋の虜のランスロの、  
話を読んでおりました。  
我らの他に人はなく、  
怪しむことつゆもなく。  
読みもてゆくうちこの人は、

・・・

震えて口づけいたします。  
その物語、それを書いたはガレオット。  
その日我らはそれ以上、  
もう読むことはいたませなんだ」<sup>2</sup>

これは、『神曲』でも最も名高いフランチェスカとパオロの恋物語の一節である。この恋が露見した二人は、パオロの兄でフランチェスカの夫ジャンチョットによって惨殺されたと伝えられる<sup>3</sup>。二人が読んでいた「ランチャロットの話」とは、もちろんアーサー王円卓騎士の一人ランスロと王妃グィネヴィアの恋物語であろう。十二世紀フランスに流行した宮廷騎士物語は、翌十三世紀にはイタリアでも大いに人気を博したと言う。ではこの二人の恋人たちが読んでいたというのは、誰が書いたものだったのだろうか。フランス語かイタリア語か、韻文か散文か、またどんな写本だったか。それに、ダンテ自身が見たのはどの版だったのだろうか。<sup>4</sup>

千二百年代後半、少なくともイタリア人でその作品の最も多く残る騎士物語作家は、ルスティケッロ・ダ・ピーサであることが知られる。後に詳しくみるが、彼は1270年代始め頃それを書いたと記している。フランチェスカとパオロが殺されたのは、1280年代のこととされる<sup>5</sup>。とすると、かの二人が読んでいたのはルスティケッロの版であった可能性はないだろうか。

結論からするとその可能性はほとんどないことになるが（後述）、かく想像してみるだけでも興味深い。というのも、この作者はそれから三十年近く後、思いがけないところに姿を現すからである。つまり、マルコ・ポーロ旅行記の筆録者としてである。その書『世界の記』*Le Divisament dou Monde*は1298年ジェノヴァの獄において編まれたという。こうしてルスティケッロを結び目として、アーサー王騎士物語の世界と、ダンテ神曲の世界と、マルコ旅行記の世界がつながってゆく。それはまた当時の全世界、すなわち十三世紀から十四世紀にかけての中世末期、騎士と十字軍と都市国家コムーネのヨーロッパと、モンゴル帝国下にあったアジア、そしてさらにはその両端にある二つの島、西のブリテンと東のジパング、を舞台として、新たな時代と新たな「世界」の幕開けを予告するものとなっているからである。

ところが、翌1299年共にその獄から解放されて後は、かのヴェネツィアの旅行家については何かと話題にのぼり、記録も多く残っているのに対して<sup>6</sup>、ルスティケッロについての情報は一切ない。このピーサの物語作家は、その栄誉と名声をマルコ独りに全て譲って、いわゆる歴史の闇の中に姿を消してしまった。どうなったのか。

## 1 ルスティケッロの発見

### <地理学会版 1824>

近代に入ってからマルコ・ポーロ旅行記の本格的な研究は、1824年パリ国立図書館蔵のフランス語写本fr. 1116(旧王立図書館7367)が同国地理学会によって出版された時に始まる。それまでかの書は、主に次の二つの印刷本テキストによって知られ、また代表されていた。一つは最も広く流布していた、またコロンブスが用いたことでも名高いピペーノのラテン語版(以下P)

であり、もう一つは十六世紀半ば頃(1559年)ヴェネツィアのユマニスト、ラムージョによって集成刊行されたイタリア語版(R)であった。刊本としては、もう一つ十五世紀末(1496年)から広く流布したヴェネツィア本があったが、これは通俗的な娯楽本で権威を持たなかった。その他ドイツ語、カスティリア語、フランス語など各国語への翻訳版があったが、これら三つほど知られなかった。手稿本としては、イタリア・アカデミーから「オッティモ」(最良)のお墨付きをもらったクルスカ版(TA<sup>1</sup>)や1307年8月の日付のある標準フランス語版(FG)を始めとしていくつかのトスカナ語、フランス語、ヴェネト語の写本が知られていたが、刊行されたことはなかった<sup>7</sup>。それに、上のような印刷本と較べて知名度において圧倒的に劣った。

それらに対して、単独写本としてはこの時初めて刊行されたこの一般に「地理学会版」(F)と呼ばれるフランス語テキストは、次の三つの画期的で重要な特徴を備えていた。

第一に、それはフランス語といっても極くイタリア語がかった独特の奇妙なフランス語で書かれていた。そのことはかえって、ジェノヴァの獄で作成された最初の形というのはいはるいはこのようなものだったのではあるまいかと疑わせしめた。

それまで、同書の原語については二つの説が有力だった。一つはラテン語で、ピピーノのテキストが最も広く普及していたことと<sup>8</sup>、ラムージョがその著名な解説の中で、マルコはラテン語で著したし、また自分も「驚くべき昔の」ラテン語写本からイタリア語に訳したと述べていること<sup>9</sup>が大きかった。ピピーノ自身はその序文で、「俗語」からラテン語に訳したと述べてはいたが、その俗語が何語かは明らかにしていなかった<sup>10</sup>。もう一つはヴェネト語(方言)で、これは単純にマルコの母語だからというものであった。他に、クルスカ版「オッティモ」の存在からトスカナ語が候補に上ることはあっても、フランス語が思いつかれることはなかった。フランス語写本の存在は知られていたが、マルコとその言語を直接結び付けるものは何もなかったからである。その他は全て翻訳であることは明らかだった。

第二に、最初の「序文」(第1章)がそっくり残っており、その最後にはっきりと、「そして彼は、イエス生誕の1298年ジェノヴァの獄にあったおり、旅の出来事を全て同じ獄にあったリュスタシャン・ド・ピズ殿に記述せしめた」と書かれてあった。

...lequel puis demorant en le charthre de Jene, fist retraire toutes cestes chouses a messire Rustacians de Pise que en celle meissme chartre estout, au tens qu'il avoit 1298 anz que Jezu eut vesqui.<sup>11</sup>

それまでこの「序文」は、ピピーノのラテン語版では彼自身の手になる序文に取って替わられ、その中にはそうしたことは何も書かれていなかった。ラムージョのイタリア語版にはこれが訳されていたが、何故かこの筆録者の名は欠落していた<sup>12</sup>。ヴェネツィア本では、これに代わってオドリーコ旅

行記の第1章が収められていた<sup>13</sup>。トスカナ語版「オッティモ」は、この序文を含む最初の数章を欠いていた<sup>14</sup>。他の写本の一部にはこの文がみられたが、その数はわずかだったし、それらのテキストは権威をもたなかった。しかもその名は、Rusta Pisan, Rustico, Stazio, Rustichelus, Restazo, Ostazo, Rustigiello, Rusticiano とおよそ様々に綴られていた。

つまりこうしててようやくかの書が、口述か翻訳か編纂かその共同作業の形態はどうであれ、最初にピーサの人ルステイケッロ<sup>15</sup>の手になったものであるらしいことが有力な説として広く知られるところとなった。

第三に、その「序文」は次のように始まっていた：

Seingnors enperaor, et rois, dux et marquois, cuens, chevaliers et bargions, et toutes gens qe voles savoir le deverses jenerasions de s homes et les deversites des deverses region dou monde, si prenes cestui livre et le faites lire, et chi[ici] troveres toutes les grandismes mervoilles, et les grant diversites de la grande Harminie et de Persie et des Tartars et Indie, et des maintes autres provinces, . . . .<sup>16</sup>

「皇帝陛下に王、公に侯、伯、騎士に市民、それにこの世の様々な種類の人間と様々に異なる土地のことをお知りになりたい御方は誰あれ、この書を手にとって読ませて下され。さすればここに大アルメニア、ペルシャ、タルタル人、インドその他多くの地の、まことにもって驚くべきことどもと、いとも種々様々なることを全てご覧になれましょう・・」

#### <ポラン・パリス 1833>

そして数年後の1833年、この冒頭の文章がさるフランス語のアーサー王騎士物語の「プロローグ」の出だしと酷似していることが、フランスの中世文献学者ポラン・パリスによって指摘された。その文章は他に類のないようなものであるうえ<sup>17</sup>、しかもその作者の名はリュスティシャン・ド・ピズ Rusticien de Piseとあった。その写本パリ国立図書館fr.1463(旧王立図書館7544)は事実、次のように始まっていた：

Seigneur, emperaor et rois et princes et ducs et quens et barons, cavalier, vavassor et borgiois et tous les preudomes de ce monde qui aves talent de delitier vos en romainz, ci preines ceste et le fait es lire de chief en chief; si troveres toutes les grans aventures qui avindrent entre li chevaliers herrans don tens li roi Huter Pendragon, jusque au tens li roi Artus son fiz et des complains de la Table reonde. . . .<sup>18</sup>

「殿、皇帝に王に君主に公・伯・男、騎士、陪臣に市民、それに物語を楽しむ才をおもちのこの世の紳士方は誰あれ、この書を手にとって、隅から隅まで読ませて下され。ウーテル・パンドラゴン王の時よりこの方、その息ア

ルトゥ王と円卓の仲間たちの時に至るまで、遍歴の騎士たちの間で繰り広げられたる大いなる冒険を全てご覧になれましょう。・・・」

この、冒頭の文章と作者の名前のほぼ完璧な一致に、これら『ギーロン・ル・クルトワ』 *Guiron le Courtois*とか『メリアドゥス』 *Meliadus*とか『パラメード』 *Palamede*とか呼ばれる作品の作者と、マルコ・ポーロ旅行記の筆録者は間違いなく同一人物と断定された。それまでももちろん騎士物語作家リュスティシャン・ド・ピズあるいはルスティチアーノ・ダ・ピーサの名は知られていたが、前述のごとき事情もあって、直ちに旅行記の筆記者と同一人物と結論づけられることはなかった。が、ここに至った以上その作者探し、「ルスティケッコの探求」が二つの方向、作品と歴史の中で行われることとなるのは当然なことであった。

## 2 ルスティケッコの探求

### 1 騎士物語のルスティケッコ

かの「プロローグ」はさらに次のように続いていた：

Et sachiez tot voirement que cestui romainz fu treslaites dou livre monseigneur Odoard li roi d'Engleterre a celui tenz qu'il passe h outre la mer en service nostre sire Damedeu pour conquister le saint sepoucre. Et maistre Rusticiaus de Pise, li quelz est imagines desovre, compile ceste Romainz, car il en treslaite toutes les tres merveilleuse nouvelles qu'il treuve en celui livre et totes les greingneur aventures. Et traitera tot sonmeemant de toutes les granz adventures dou monde, mes si sachiez qu'il traitera plus de monseigneur Lanc eloth du Lac et de monseigneur Tristan de Leonois, [le fiz au roi Meliadus de Leonois], que de nul autre, por ce que san faille il furent li mellior chevalier que fussent a lour tenz en terre; et li maistre en dira de cist deus plusor chouses et plusor batailles que furent entr'aus que ne trueveres escrit en trestous les autres livres pour ce que li maistre le trueve escrit eu livre dou roi d'Engleterre. <sup>19</sup>

「またこの物語は、イギリス王オドール卿が我らが主なる神に仕えて聖墓の征服に海の彼方にお渡りになったおり、その書物から訳されたものであることをとくにご存じありたい。上にその肖像の掲げてある<sup>20</sup>ルスティシヨール・ド・ピズ師がこの物語を編んだ、すなわち、その書にみられるすべてのいとも驚くべき話とすべての大いなる冒険を訳したのである。また、世界の全ての大冒険をごくかい摘んで語るであろう。しかし、他の誰よりもラックのランスロ卿と [レオノワのメリアドゥス王の息] レオノワのトリスタン

卿についてより多く語るであろう。なぜとならば、疑いもなく彼らはその頃地上におわした最高の騎士だったからである。それで師はこれら二人について、他のいかなる書にも書かれていない、彼らの間であった多くのことと多くの戦いについて語るだろう。師はそれらが、イギリス王の書物に書かれてあるのを見い出したのであるから。」

また、ルスティケッロの名を冠して出版されていた騎士物語の後世の印刷本では、その「エピローグ」に、イギリス王ヘンリーが授けてくれる高い評価ゆえにその書を借りられたこと、王自身から続編を編む仕事を命じられたこと、それでひと休みして、冬の寒さが過ぎて四月の快い季節になったれば取り組むであろう、といったことが書かれていた。そして事実その続編の「プロローグ」には、いい季節が到来して王との約束をはたした、そしてその褒美としてヘンリー王から二つの城を贈られた、といったことが書かれてあった。<sup>21</sup>

さらにその続編の「エピローグ」は、次のように終わっていた：

Ci fine maistre Rusticien de Pise en loant et en ringratiant le pere et le filz et le saint esperit et .I. meismes dieu filz de la benoite vierge Marie de ce que il m'a donne lieu et temps force et sens de mener a fin si haulte et si noble matiere comme est ceste dont j'ay traittie en mon livre de tant de nobles preudeshommes .... Et s'aucuns me demandoit pourquoy je ay parle en mon livre de Tristan avant du roy Meliadus son pere, je respons que ma matiere le requeroit, car je ne puis pas avoir mises toutes mes paroles en ordre pour les intervalles qui avenoient entre deux fais. Et pour ce que cest livre n'est mie propement d'une seule personne fait, ne il n'est tout de Lancelot du Lac, ne il n'est tout de Tristan, ne tout du roy Meliadus, ains est de plusieurs histoires et de pluseurs croniques dont je les ay extraites et compillees a la requeste du Roy Edouart d'Engleterre, sicomme il est contenu au commencement de mon livre, et cest livre est appelle Meliadus por ce que le roy Meliadus fist plus de nobles fais a cellui temps que nul des autres chevaliers de qui nous avons parle.<sup>22</sup>

「リュスティシャン・ド・ピズ師は、そこから私が本書においてかくも多くの貴顕のことを物語った、このような高く貴い題材を終わりまで導く所と時、力と情を私に授け給うたことに、父と子と聖霊、そして優しき童貞マリアの子たる唯一なる神を讃えかつ感謝しつつ、ここに終る。・・もし誰方が、私が本の中でその父メリアドゥス王より先にトリスタンのことを語ったのは何故かとお尋ねになるならば、題材がそれを必要としたからだとお答えしよう。というのも私は、それら二つの間にあった隔たりのため、私の言葉を全て順序だてて置くことはできなかったからである。また、本書は全くた

だ一人の人物についてものされたものではなく、全て湖のランスロについても、全てトリスタンについても、全てメリアドゥス王についてもなく、本書の最初に述べたごとく、イギリスのエドゥアール王の求めにより、私がそこから引き出して編んだ多くの歴史と多くの年代記からなされたものだからである。また本書がメリアドゥスと呼ばれるのは、その当時メリアドゥス王がここに語った他のどの騎士たちよりも多くの高貴なことをなしたからである。」

そこでとりあえず、ルスティケッコとイギリス王家との接点が探られることとなった。まず、前編の「エピローグ」と続編の「プロローグ」が本当であるなら、ルスティケッコはイギリスにあって、宮廷作家としてエドワードの父ヘンリー三世（在位1212-72）に仕え、その仕事の褒美として二つの城をもらったのであろうと考えられた<sup>23</sup>。が、王が誰か作家に城を贈った事実はもちろん、そうした名の人物が宮廷に滞在したという記録も一切見い出されなかった。そこで、作品の別の箇所では自分の名はエリー・ド・ボロンであると述べていることから、城云々の事実はともかく、これはルスティケッコが種本として用いたその原著者エリー・ド・ボロンのことであろうと推定された。かくて、ルスティケッコがイギリスに滞在し、イギリス王家に仕えたとする事実は否定された<sup>24</sup>。もっとも、この原作者エリー・ド・ボロンも正体不明で、謎の人物のままであるが。

次に、最初の「プロローグ」と最後の「エピローグ」にあるエドワード(1239-1307、在位1272-1307)との接点が探られた。

エドワードとイタリアの関係は結構深い<sup>25</sup>。まず、そこにもあるとおりフランスのルイ九世主導になる1270年の最後の十字軍に参加したことが知られる。まだ皇太子だった彼は、その年の7月末イギリスを発ち、フランス経由で11月8日頃チュニジアに着いた。しかしルイ王はすでに8月25日同地で疫病に倒れていた。エジプト遠征は中止となり、王の弟でシチーリア王となっていたシャルル・ダンジューに伴われて同島に渡り、その宮廷で冬を過ごした<sup>26</sup>。翌1271年5月始めエルサレムに赴くべくトラパニから出航し、途中キプロスに寄って、同月9日にアークレに着いた。そしてその地シリアには翌年秋まで滞在した。1272年9月24日そこから再びシチーリアに向かい、翌1273年の1月頃そこに着いたと見られるが、到着と同時に父王ヘンリー三世の死(前年11月16日)と自らの王位継承を知った。しかし海路すぐイギリスには向かわず、イタリア本土に渡って、南イタリア(1.19)からローマ(2.5)、オルヴィエート(2.12)、そこからエミーリア街道をレッジョ・エミーリア(5.20)、パルマ、ミラーノと北上し、モン・スニ峠を越えてサヴォイアに入り、パリ(7.26-8.6)を経てイギリスの土を踏んだのは実に翌1274年8月2日のことだった。

もしルスティケッコの言葉に信を置くなら、彼がエドワードの知己を得て本を借りられたのはしたがってこの間、1270年11月から1273年夏頃までの間

ということになる。前述ポラン・パリスは、エドワードのシチーリア滞在中(1270.11-71.5)であろうと想像した<sup>27</sup>。つまり、ルスティケッコが同島のシャルル・ダンジューの宮廷にあったとき、そこにやって来たエドワードから円卓騎士の物語を借り、シャルルの命か許可でその本を要約し、自分の作品を編んだ。そしてエドワードがエルサレムからの帰路シチーリアに戻ってきたとき、それを返した、と。これに対してユールは、ルスティケッコがシャルルについては何も触れていないことから、もし出会ったとしたらシリア滞在中(1271.5-72.9)のことではないかと推測した。しかしヘンリー三世との関係は、後世の編者による原作者エリー・ド・ボロンとの混同であろうと結論した。<sup>28</sup>

後にベネデットは、それぞれの最も古い写本である騎士物語のフランス国立図書館ms. 1463と旅行記のms. 1116を比較検討して、かの冒頭の文以外にも宮廷への到着・滞在・出発、戦闘場面、挨拶の交換など、ほぼ全く一致する語句・文・表現・用法の数多くあることを例証し、その作者が同一人物であることをさらに確かなものとした<sup>29</sup>。一方ルスティケッコとイギリス王室との関係については、確実な根拠となる記録を一切欠くことから、ユールと同じ結論を下した。

その後特に取り上げられることもなかったが、最近アメリカの研究者クリッチリーは、もし出会ったとすれば、エドワードを王と呼んでいるところからして、むしろシチーリアからイギリスへの帰路(1273.1-1274.8)、特にローマ、オルヴィエート、レッチョ・エミーリアを通ったとき(1273.2-5)のことではないかとする。しかし彼も、実際にはルスティケッコが彼の知己を得た可能性は薄く、自分の作品に権威をつけるために、原著者エリーにならって時のイギリス国王の名を拝借したものであろう、と結論している<sup>30</sup>。となると、1271年頃とされているその制作年代も疑問視され、もっと後年のものである可能性がでてくる。確かに、おそらく1284年メローリア海戦での捕囚、さらには1298年頃のマルコとの出会いまで、あまりにも間が開きすぎているとの印象は否めない。<sup>31</sup>

## 2 ピーサのルスティケッコ

ルスティケッコを、故郷と考えられるピーサの古記録の中に探す試みは、Fの出版以前からもあった。

### <テムペスティ 1786>

その最初はピーサの司祭ラニエーリ・テムペスティによるもので、1786年(12.29)同市のアカデミーでの講演で彼は、当時のピーサの記録に現れる同名の人物のうち、1280年のアンツィアーニ(長老)評議会のリストにその名の載っているルスティケッコ・ディ・レオパルド・バルサーニRustichello di Leopardo Balsaniに同定した<sup>32</sup>。この説はその後、19世紀に入ってFの

出版以後も、バルデッリ-ボーニ、バルトリらによってもそのまま受け継がれた<sup>33</sup>。当時のピーサではルスティケッロという姓あるいは名は他にも多かったが、都市国家コムーネの代表行政官たるプリオーレになっているのは、その中では唯一この人物だけであることが魅力的であった。しかし、名前の一致以外何の根拠もなかった。

#### <ミキェーリ 1925>

その後1925年、ピーサ史家ミキェーリも自ら調査した上でこの説を支持した<sup>34</sup>。彼はしかし、このRustichello Balsani (Balzani)の名は1280年から1292年8月までアンツィアーニの名簿に何度も現れることを発見した<sup>35</sup>。そのことは、1284年のメローリア海戦でジェノヴァに捕えられたとの一般に考えられている説と矛盾する。そこで彼は、ルスティケッロが捕虜になったのはメローリアではなく、その後も各地で衝突を繰り返していた両市の1292年以後の戦いであろうと考えた。その方が、1298年にジェノヴァの獄でマルコと出会って旅行記を編むまでの時間が短くなり、かえって好ましいというわけである。<sup>36</sup>

そして彼は、その人物像を次のように描いた。1280年すでにコムーネ行政の評議員に選ばれていることからして生誕は1240年頃、海洋都市国家ピーサが最も発展していた時代、アルノ北岸の西ポンテ区にあった家は旧家でフランスとイギリスに遊学させてもらい、同地の文学特にアーサー王物語に魅せられた、イギリスの宮廷でヘンリー三世に仕え、エドワードの十字軍に同行し、シチーリアのシャルル・ダンジュの宮廷でその命により騎士物語を書いた、そして1275年頃祖国に戻り、1280年頃から公職に就いた、と。

#### <ベネデット 1926, 1928>

このミキェーリの説はしかし、翌1926年すぐベネデットによって、名前の一致以外何の根拠もないと厳しく批判された<sup>37</sup>。事実、テムペスティに始まりミキェーリまで続いたその説は、ただルスティケッロという名をもつ当時のピーサ人の中で、唯一アンツィアーニになっていたバルサーニに当てはめたというだけで、それ以外一切の史料的根拠をもたなかった。

その二年後の1928年、Fのテキストを新たに校註して出版し、同時に諸写本に関する浩瀚な研究を発表したおり、ベネデットは自分でもトスカナ各市とジェノヴァの古文書庫を調べたが、結局「確かなことは何も発見できなかった」。しかし、その頃のピーサには公証人の一大家系があり、その中にグイドGuidoとルスティケッロの名が頻繁に現れることから、その中に我らが謎の師が隠れているかもしれないことを示唆した。<sup>38</sup>

#### <デル・グェッラ 1955>

十三世紀当時大いに流行したアーサー王騎士物語の作者としてけっこう名が知られ、フランス語にもかくも堪能だった者が、ピーサのような小さな町の記録に残っていないはずがないと確信して、このベネデットのヒントを手がかりに古文書のさらに徹底的な調査を行い、1955年新たな説を提示したの

がデル・グェッラである。<sup>39</sup>

彼は、数多く登場するルスティケッコたちが属する家系を、1. 特殊 2. 投機家 3. 毛皮職人 4. 金細工師 5. 公証人・判事 6. 商人 の六つに分け、問題のルスティケッコがフランス語のできた文人であることから、前四つは退け、後の二つ、とりわけ聖職者や貴族と共に当時の教養人階層を構成していた5. 公証人の家系を取り上げて調べた。それによると、次のごとくであった。

まず、最も多く記録に現れるのがグィード・ディ・ルスティケッリ・ダ・ヴィーコ-ピサーノ Guido di Rustichelli da Vico-Pisano で、1261-1316年にわたる。人気のある公証人だったらしく、起草件数は最も多い。最後の記録は1316年であるから、1317年頃没したと推定される。またその名から、この家族の出身地は市から東へ約十キロのヴィーコ-ピサーノだったことが知れる。その父はマエストロ・ルスティケッコ Maestro Rustichello と呼ばれ、1284年1月に死亡している。〈マエストロ〉の肩書きからして、彼も公証人だったと推定される。一方グィードの子には、ジョヴァンニ Giovanni、ビンド Bindo、ルスティケッコ、イルデブランディーノ Ildebrandino、セル・ベルカイレ Ser Belcaire があり、修行中のベルカイレを除いていずれも公証人・判事である。このうちルスティケッコは、1309年の記録にケッルス Chellus またはルスティケッルス・ディ・ルスティケッリ Rustichellus di Rustichelli として、コムーネの公証人にして判事、さらに仲裁人・控訴人の法廷の裁判官として登録されている。ケッルスの名は1322年以降は現れない。このルスティケッコには子イアコポ Iacopo があり、やはり公証人で、1334年に quondam 〈故〉となっていることから、それ以前に死亡したことになる。さらにその子グリェルモ Gulielmo とフランチェスコ Francesco も公証人である。

40

以上からデル・グェッラは、ここに登場するグィードの子ルスティケッコを我らが作家と同定した。そしてその人物像を次のように描いた。1250から60年頃ピーサに生まれ、父から北イタリアかフランスに遊学させてもらってフランス語を学び、騎士物語文学に手を染めた、したがってアーサー王物語を書いたのは1270年代始め頃のことではなくずっと後であり、例の「プロローグ」のエドワード云々はもちろん捏造である、三十歳頃おそらく1284年のメローリアで捕虜となり、1299年の解放後は祖国の功労者として遇され、家業を継いで法律家となった、その起草件数が最も少ないのはその後も文学活動に熱を入れたためであろう、と。

また、1318年に「グィード・ルスティケッコの遺産家屋」他の記録があり、それによるとこのルスティケッリ家は、ピーサ市内アルノ川北岸の中央メッゾ区の San Lorenzo alla Rivolta、今の Santa Caterina 広場（図Ⅲ-3）の近くにあり、さらに当時の土地台帳からすると、その広場の南側道路現 Via San Lorenzo に面し、それと交わる Via Berlinghieri の角付近にあった。彼の仕事場であるクーリア（法廷）は今の Sant' Ambrogio 広場に面するコムー

ネの建物の中にあり、家からすぐであった、と言う。

デル・グェッラのこの説に対しては、特に反論も支持も出ていない。なるほどその可能性はあろうが、これまたミキエーリのルスティケッロ・バルサーニ説と同じく、当時の同名の人物のうち年代的に支障の生じない者の中から最適のルスティケッロを選んだというだけで、名前の一致以外決定的な根拠を欠くうらみがある。さらに誰しも抱くのが、若くして騎士物語を書き獄中ではマルコの書を編みながら、解放後法律家となって文学活動を一切放棄してしまうというようなことがあり得るだろうか、という疑問であろう。また、その後もピーサに留まっていたのなら、その後の記録で彼の名に、‘アーサー王物語作家’あるいは‘マルコ・ポーロ旅行記筆録者’という誉れ高き肩書きが一言書き添えられてしかるべきではなかろうか、という思いである。しかし、そうした気配は一切ない。ルスティケッロは、その作品を英王エドワードに結び付け、ましてや巻頭に自分の肖像(図Ⅲ-1)を掲げるほど、自己顕示欲の強い人物ではなかったか。

### 3 旅行記のルスティケッロ — マルコ・ポーロ研究の歴史

ジェノヴァの獄中で作成されたオリジナルに最も近いとみられる写本(F)での筆録者ルスティケッロの登場はまた、当然ながらその人物探しとは別に、作品の成立過程と用いられた言語、それに筆記者の役割をめぐって改めて大きな問題を提起せずにはおかなかった。

それらの問題についてはそれまでももちろん一致をみていなかったが、マルコを著者とすることに異論はなく、問題は原語が何だったか、ラテン語か俗語かであった。前述のピピーノはまた、大部な世界史である後の主著『年代記』の中に当時の東方世界についての多くの記事を、自分が訳したマルコの旅行記から採っているが、そこでもそれを「ロンバルディーア俗語」からラテン語に訳したと記していた<sup>41</sup>。当時ロンバルディーアとは広く北イタリア全体を指し、したがってヴェネト地方も含まれた。その俗語版を原著と見なす場合は、おそらくマルコが生地のヴェネツィア方言で口述し、誰かがそれを筆記したのであろうと想像された。一方ラムージョはその集成訳に付けた長い著名な解説で、「ジェノヴァ人貴族の助けを借りてマルコ自身がラテン語で書いた」と述べていた。母語ヴェネト語の方がより自然だと考えられてはいたが、グリナエウスの『ノウス・オルビス』を始めとしてラテン語版が圧倒的に多かったのと、そのラムージョの物語る真に迫ったお話がマルコ伝記の「正伝」として権威と信頼を得ていたこともあって、ラテン語説も有力であった。いずれにしても、ルスティケッロとフランス語が問題となることはなかった。

それに、もう一つの古くからの大きな問題があった。すなわち、ラムージョ版にのみあり、他のどの版にもない多くの記事をどのように考えるかの問

題である。マルコ本人の手になるが、ジェノヴァではなく解放後ヴェネツィアにおいて付け加えられたとする説と、後世の写字生や編訳者あるいはラムージョ自身によって補われたとする説があった。前者が優勢ではあったが、後者も根強かった。

Fの出版は、これらの問題をさらに複雑にしたが、同時にテキストの成立過程、つまりジェノヴァでの共同作業とそこでのルスティケッロの役割をめぐって活発な議論を惹き起こした。問題点を整理すると次のようになる。

(1) 全く口述筆記によったか、それとも何らかの書かれたものによったか。

(2) マルコは何語で語ったか、またその書かれたものは何語で認められていたか。

(3) その書かれたものの完成度はどの程度だったか、メモ・ノート程度だったか、それとも日誌・旅行記・交易案内などそのまま草稿となり得るようなものだったか。

(4) 筆録するに当たってのルスティケッロの役割はどのようなものであったか、口述を筆記しただけか、マルコが用意した草稿と呼び得るようなものをフランス語に移し変えたのか、あるいはその口述やメモ・ノートや草稿を編纂したのか、それともそれらから独自に記述したのか。

(5) R（と後に発見されたZ）のみにあり、F（やT・Pその他）にない多くの記事はジェノヴァで作成された原本にすでにあったものか、それとも後に書き加えられたものか、もし書き加えられたのなら誰によってか。

ここで我々にとって問題となるのは、とりわけ(4)のルスティケッロの役割である。マルコの語るとおりに書いたのなら単なる口述筆記者であり、草稿をフランス語に置き換えたのなら翻訳者であり、それらを編んだのなら編者であり、それらから記述したのなら執筆者であり、ほとんど筆者である。そしてこの順で彼の役割は大きくなる。が、その一つだけだったということはありえないであろうし、それには残りの問題が絡んでくる。とりわけ(5)のRとZにのみ見られる記事も、ジェノヴァの段階ですでにあったのならルスティケッロの手になるものであり、後に書き加えられたものなら彼は関わっていないかもしれないことになる。以下、F登場後の主たる論説を、書かれた資料の言語と性格、二人の間で用いられた言語、それにルスティケッロの役割に焦点を当てながら、掻い摘んでたどってみる。

### 3.1 ベネデット以前

#### <マースデン 1818>

テキストとしてはラムージョのものが採用されていたが、近代最初の総合的なマルコ・ポーロ研究は、Fテキストの出る数年前にイギリスの東洋学者マースデンによって始まっていた<sup>42</sup>。1818年彼がその英訳にラムージョ版を選んだのは、それまでグリナエウス(1532年)とミューラー(1671年)以来決定版となっていたピピーノのラテン語版と比べてみて、そのテキストの方が

内容の点でも分量の点でも「決定的に優れている」ことを再発見したからであった。マルコの旅や生涯、その書の成立の事情などについてはマースデンも全般的にラムージョの著名な「序文」に依拠したが、しかし用いられた言語についてはそのラテン語説に疑問を呈し、ピピーノを含めてラテン語版の编者たちが一様に言っている「俗語」つまりヴェネト語であろうと訂正した。そして彼は、前世紀半ばアポストロ・ゼーノによって紹介されたヴェネト語版ソランツィアーノ写本(V)<sup>43</sup>をオリジナルに近い最も古い手稿の一つとみなし、その「序文」に、「ピーサ市人ルスティリエロ」 Rustiglielo citadin di Pixaによって書かれた(ただし1299年)、とあることに注意を喚起していた。

#### <フランス地理学会 1824>

そして1824年、フランス地理学会と编者ルーは、F (Ms fr. 1116) の出版がその後のマルコ・ポーロ研究を画期するものとなろうとは予想もしていなかったに違いない<sup>44</sup>。というのも彼らは、それをオリジナルと確信して出したわけではなく、『旅行記回想録集』*Recueil de Voyages et de Memoires*の第一巻にそれを選んだのは、まだ一度も刊行されたことはないが、その写本が今までに知られているどれよりも長くまたたくさんの記事を含んでおり、したがって元からのものが最も多く見出される可能性が高く有益かも知れないから、というものであった。そこで彼らは、その古い形を尊重するため、綴りや文法の明らかな誤りや不明な部分も一切校訂することなくテキストをそのまま刊行することとし、そのかわりにその余りにも奇妙なフランス語原文の理解を補うべく、同図書館のこれも未刊だったラテン語写本(Ms lat. 3195)のテキストと主要語彙の現代語訳を付録としてつけたのだった。<sup>45</sup>

ではその写本は、どのようにして生まれたと考えられたか。彼らもほぼ全面的にラムージョの解説にのっとっているが、ルーによると、ジェノヴァの獄に捕らわれたマルコはヴェネツィアから資料を取り寄せ、それを整理して目の前で同囚だった一ピーサ人に書かせた。それはすぐ有名になり、次々と写本や翻訳が作られ、内容も変質していった。またマルコ自身も何度か手直しして、追加したり削除したりしてより完全なものにしようとした。マルコが用いたのは旅行中も父や叔父との間で使っていた母語ヴェネト語であろうが、この写本に用いられているのは、当時地中海地域で国際共通語として広く用いられていた類のフランス語であり、したがってこれは「オリジナル見聞記の一つの古い翻訳」であろう、と。

ルスティケッロについては、本文にその名がはっきりと記されているにもかかわらず、確信が持てなかったためか「一ピーサ市人」としかせず、そのテキストが最初そのピーサ人によってイタリア語で筆記されて後に誰かによってフランス語に訳されたのか、それとも彼自身によるフランス語訳なのか、明確には述べていない。当然とはいえ、彼らの関心はもっぱら地理学上のこ

とにあったがため、このテキストに対する学会の態度と編者ルーの判定はこのように曖昧なものであったが、この見方が、常識的だが意外と的を射ているのではないかと思えることは後に見る。

#### ＜バルデッリ-ボーニ 1827＞

しかし、Fの出版はすぐ反響をもった。トスカナ大公国の東洋学者バルデッリ-ボーニ伯は、それ以前からクルスカ版「オッティモ」出版の準備を進めていた。「オッティモ」(TA<sup>1</sup>)は、それがトスカナ語版であることと、余白に次のような書き込みのあることによって、オリジナル候補の一つとみなされていた：

「この書は、クリストの1309年に亡くなった我が母方の曾祖父ミケーレ・オルマンニによってフィレンツェにおいて書き写された。ヴェネツィアの高貴な市民マルコ・ポーロ殿の航海記と呼ばれる。我が母がこれを我がリッチォ家に持ち来たもので、私ことピエーロ・デル・リッチォと私の兄弟のものである；1452年」<sup>46</sup>

転写した人物であるオルマンニが1309年に死亡したのなら、その原本は当然それ以前、十四世紀の冒頭かあるいはひょっとして一千二百年代最後の年の可能性も有り得る。しかもフィレンツェにおいてである。

しかし1827年、大部な東西交渉史の研究を付してラムージョ版テキストとともにそれを出版したバルデッリ-ボーニは、Fと対校した結果、Tが明らかにFから派生するものであることを「発見」した。<sup>47</sup>

トスカナ語版がこのフランス語版からの訳であることは、tres<とても>がtre<三つの>、boue<泥>がbuoi<牛>、jaddis un roi<かつて一人の王>がJaddis uno re<Jaddis王>と訳されているなど、フランス語原文の意味が分からずして、それに似たイタリア語を当てはめたため文意が通らなくなっている箇所が多いこと、地名や数量の単位にはフランス語がそのまま用いられていることなどから簡単に証明される。また、内容的には基本的に一致する一方、言語的には話し言葉そのままの表現や繰り返しが省かれて全体的に整理され、分量的にもかなり短くなっていることから明らかである。

そこで彼は、マルコのオリジナル・テキストには三種類あると考えた。彼もラムージョの解説から出発する。ヴェネツィアから取り寄せた旅行中の記録をもとにマルコは「さるピーサ人」に口述した。その記録は、自分用のものであるからヴェネト語であったかもしれないが、それでは相手に通じない。若くして旅に出たからラテン語は学ばなかった。それに二十年後には早くもピピーノのラテン語訳が出ている。となると口述は、当時イタリアでもオリエントのヨーロッパ人社会でも広く用いられており、教養人の言語でもあったフランス語ということになる。マルコも長の旅行中にそれを自然と身に付けた。したがってFは、1298年の口述されたオリジナルに極めて近い一写本であり、奇妙な下手な文体がそれをよく証明している。これをジェノヴァ版とする。

しかし解放後マルコはヴェネツィアでこれを手直しし、新たな記事を加えたり、子供っぽい話を削除したり、記事の順序を少し替えて三巻に分けて読み易くした。その改訂版を訳したのがピピーノのラテン語版である。これを第一次ヴェネツィア版とすると、マルコの手直しはそれにとどまらなかった。持ち帰ったメモに基づいてさらに多くの記事を追加したのが第三のオリジナル（第二次ヴェネツィア版）で、それからイタリア語に訳されたのがラムージョ版であり、記事の量とその内容の点で最も優れたものとなった。他になくRにのみ多くの記事がみられることはこうして説明できる、と。<sup>48</sup>

バルデッリ-ボーニは、ラムージョの言うところの、獄中でマルコを手伝った「ジェノヴァ人貴族」とはこのルスティケッロのことであろうと考える。写本によってその綴りが様々であるがRustichelloが正しく、PisaのRusca家の者であろうと推定した。さらに、前述テンペスティのR. di Leopardo Balzani説を紹介し、同一人物であるかもしれないと支持した。また、Fがかつてヴァロワの王立図書館に所蔵されていたことから、後にみるが、これこそがマルコがティボー・ド・セポワに与えたコピーであり、もう一つのよく知られたフランス語稿、標準的な良好なフランス語で書かれているいわゆるグレゴワール写本FG（後世の命名であるが以下この呼称を用いる）は、Fからの後の訳であろうと推理する。<sup>49</sup>

彼の説は、三つのテキストF(T)とPとRの異なりを余りにもマルコその人の手に帰せしめているが、オリジナルに三つの段階を想定する考え方が注目された。ともあれ、TがFから派生したものであることはこうして確定した。と同時に、オリジナル候補の一つであった「オッティモ」とその言語トスカナ語がまず姿を消し、代わってFとフランス語が急浮上した。またこれは、諸写本・刊本の系譜関係解明の最初の試みでもあった。

#### <パリス 1833>

前述「プロローグ」の類似性からルスティケッロを「発見」した(1833年)ポラン・パリスも、フランス語説を強調する<sup>50</sup>。彼は、二十年たらず後に早くもピピーノのラテン語訳が出ていることに注目し、しかもはっきりとそれを俗語から訳したと述べていることから、多くの人を読めるようラテン語訳を必要とするほどその原語が分かりにくいものであった、と考えた。つまり、イタリア語でもラテン語でも普通のフランス語でもなく、まさにFのごとき、翻訳を必要とするような特異なフランス語で書かれてあったからで、そのいい例がFから良好なフランス語に訳されたFGである、と。<sup>51</sup>

パリスは、当時十字軍の往来、騎士物語の流行、またアンジュー家の進出によって、ヨーロッパとりわけイングランドからイタリア、さらにはコンスタンティノープルからシリアに至るまで、フランス語がリングァ・フランカ（国際共通語）として広く用いられていた事実を強調し、まさしくそこを舞台とする国際交易商人であったポーロ家は当然フランス語ができ、したがってマルコのノートもそれで書いてあり、獄中での対話もフランス語でなされ

たであろうと推測する。現に、今や同一人物であることが確実となったルスティケッロは騎士物語を同じようなフランス語で書いている。彼によれば、写本Fは十四世紀の始めイタリア（ほぼ確実にヴェネツィア）で作成された最も古い手稿である。ということは、ルスティケッロの直筆ではないことを意味するが、極めてそれに近い第一次写本であることは疑いない。ただ彼は、マルコとルスティケッロの役割分担については特に触れていず、マルコはその旅の最初の報告を彼に与え、「その手記を書いたのはルスティケッロである」とするのみであった。また、ラムージオ版についても何も述べていない。<sup>52</sup>

かくしてラテン語もまた決定的に退場し、残る対抗馬はヴェネト語だけとなった。もっとも、Fの登場とともにこれもバルデッリ・ボーニやズルラによって疑問視され、ソランツィアーノ写本にしてもそのヴェネト語が拙劣なものであること、写本自体がずっと後世(15世紀)のものであることことから、オリジナルではないであろうと推定されるに至っていたが。

#### <マーレイ 1844>

1844年に地理学会テキストを主底本とし、バルデッリ・ボーニのトスカナ語版とラムージオ版からも補って英訳版を出したマーレイは、これらの流れをほぼ全て認める<sup>53</sup>。そのフランス語が余りにも奇妙だったためそれまで顧みられなかったがFが最も古い写本であること、したがってオリジナルはフランス語であること、TAはそのトスカナ語訳であること、Pもそのさらに要約したラテン語訳であること。しかしRをマルコによる改訂版とする説には反対する。地理上・行程上の大きな誤りがあること、他の章では賞賛しているのにアフマドの記事ではフビライに敵対的であること、ラムージオ自身が原本はラテン語だと言っていること、ルスティケッロの名の見られないこと、表現や文章が異なることなどからである。ではRの新記事は誰の手になるものか、はっきりとは述べてないが、当時は想像以上に東西の交渉が密だったことから、他の典拠とりわけ宣教師たちが書き加えたことをほのめかす。ルスティケッロについては特に論じていない。

#### <ラザリ 1847>

1847年にやはり地理学会版をイタリア語訳し、それに欠ける記事をRから補足して出版したラザリもほぼ同様である<sup>54</sup>。彼も、Fが最も古くオリジナル写本である可能性の高いこと、あらゆる点でフランス語で書かれたと推定されることを支持する。二人の共同作業については、そのテキストの中ではマルコが一人称で語っているところもあるが、基本的にはフランス語で書かれていた彼のノートを基に、ルスティケッロがマルコと「対話しながらそれを編集した」のであろう、と言う。R版の問題については、彼も後世の手になるものであるとするが、マーレイのように宣教師によるものではなく、ハイトン、コンティ、バルボサ、ピガフェッタらの後の旅行記からラムージオ自身が取って加えたものであろうとみなす。

またこの頃からポーロを中国文献の中に発見しようとする試みが始まっていた。その最も早いものがこのラザリで、彼によれば、1282年のアフマド事件についてフビライに報告した役人「孛羅 Po-Lo」がそれであった。<sup>55</sup>

#### ＜バルトリ 1863＞

1863年に再び「オッティモ」を、それに欠けている章をFから補って出版したバルトリは、写本1116をオリジナルそのものと見なす<sup>56</sup>。いかにも外国人のフランス語オイル語で書かれていること、口述そのままの言い回し、繰り返しや冗語の多いこと、一方内容的には他の版にない多くの記事を含んでいることがそれを証明する。しかし、マルコがフランス語で語ったとする説には疑問を呈し、ヴェネト語を、それに慣れていぬトスカナ人の筆記者に分かるよう半分フランス語に変えてしゃべった慨然性の方が高い、あのような変なフランス語になったのはそのためだ、と言う。

他の版、もう一種のフランス語版（FG）については、ティボー・ド・セボワがマルコからもらったのはFのコピーであったが、そのフランス語が余りにも奇妙なものだったから、マルコ自身の助けも得て正しいフランス語に訳させたものであると見る。トスカナ語版を始めとする他の写本は全てこのFかFGのどちらかから派生したもので、そこにはマルコの手は加わっていない。したがって、Pはピピーノによるそのラテン語訳、Rはラムージョによるイタリア語訳であり、そこに見られる新たな記事はピピーノあるいはラムージョ自身によって書き加えられたものであろう、と言う。

#### ＜ポーチェ 1865＞

これら、Fの登場以来それをオリジナルそのものあるいはそれに極めて近いコピーとする考えに反対し、もう一つの早くから知られたフランス語稿であったいわゆるグレゴワール写本、パリ国立図書館fr.5631を主底本とし、同図書館の他の二つの稿本fr.2810（名高い「驚異の書」）およびfr.5649を対校し、それにFやRの記事を註に加えて1865年に出版したのがポーチェであった<sup>57</sup>。彼もまた、最初ジェノヴァでの作業がフランス語で行われたこと、つまりマルコがフランス語で口述し、ルスティケッロがフランス語で筆記したことは認める。ところが出来上がったのは、あのとおりひどいものだった。それに不満だったマルコが、解放後のヴェネツィアで内容的にも「自ら見直し訂正して」完成したのがFGである。したがってそれをこそマルコの自筆稿、唯一の真正なテキストと考えるべきである、と言う。

ポーチェが論拠とするのは、そのテキストが事実標準的な文法的に正しいフランス語であったことの他に、もう一つは同写本の冒頭に掲げられている名高い「前書き」である。それには次のようにあった：

「この書は、セボワの君主騎士ティボー殿下（神よ赦し給え）が、ヴェネズ市の御方にして住人マルク・ポル殿に所望なされたコピーである。かのマルク・ポル殿は、いと誉れ高く、数々の地の風俗習慣にいたく通じた御方である。彼は、自ら目にしたことが全世界に知られることを望み、またフラン

ス王の息にしてヴァロワの伯、いとも優れて剛き皇子シャルル殿下に対する  
栄誉と崇敬のため、その書の、その作成後最初のコピーを、上述セポワの君  
主に授け贈ったのであった。また彼は、かくも高貴の御方のためにフランス  
の貴き地に伝わりもたらされることを、大いに歎んだ。上にその名を揚げた  
セポワの君主ティボー殿下によりフランスに持ち来られたそのコピーから、  
その長子でありその死後セポワの君主となられたジャン殿下は、それがフラ  
ンス王国に持ち来られて後かつて作られた同書の最初のコピーを、そのい  
とも親愛なる畏れ多き君主、ヴァロワの殿下に捧げ給うた。その後彼はまた、  
それを所望する友人たちにそのコピーを与えた。マルク・ポール殿が上述セポ  
ワの君主にこのコピーを与えたのは、彼が、ヴァロア伯とその妃であるお后  
のために、コンスタンティノーブル全土におけるこれらお二方の総代理とし  
てヴェニスに赴いたときのことであった。これは、我らが主イエス・クリス  
ト生誕一千三百七年八月の月に作られた」<sup>58</sup>

ポーチェはこの文章に全面的な信頼を置き、「最初のコピー」とあること  
を強調する。それは何かの訳ではなく、しかもマルコ自身から直接与えられ  
た、と述べてある。つまり、マルコはヴェニスに滞在中だったティボーと何  
らかの形で識り合いになり、その主君であり現国王フィリップ四世の弟に当  
たるヴァロワ伯シャルルに自分の本を贈ろうと思いついたが、ジェノヴァで  
出来上がったものが余りにもひどいものだったので、それを見直すことを考  
えた、というわけである<sup>59</sup>。したがってFはマルコの口述に基づいたルス  
ティケッロによる暫定的な編纂物でしかなく、それをオリジナルと呼ぶこと  
はできない。またポーチェは、かの序文冒頭の「皇帝陛下・・・」云々の部分  
のないこともその証拠に挙げる。その箇所がマルコの謙虚さを損なうもので  
あったから、マルコが自ら削ったのだと。またFにはない記事のあることも、  
その証拠であると。

しかしながら、それほどフランス語ができるなら何故マルコは最初から自  
分で書かなかったのか、との単純な疑問を禁じ得ないし、そのフランス語に  
しても後世に誰かによって訳されたものである可能性が高いうえ、問題の前  
書きにしても、それが絶対的に事実であるかどうかは確証されない。またそ  
の後の研究により、内容的にもFよりむしろ劣るものであることが指摘され  
ている。さらに、このテキストの「序文」にも、末尾の「1298年ジェノヴァ  
の獄にてルスティケッロにより」の一文は残っており、もしマルコ自身によ  
って書き直されたものであるなら、これこそ削って書き直すのが自然ではあ  
るまいか。

もっともポーチェも、Fが1298年にジェノヴァでルスティケッロの手にな  
った最も古いものであること自体は否定していないのだから、注目されるの  
は、別の形ではあるが前述バルデッリ・ボーニと同じく、オリジナルにはル  
スティケッロの手になるジェノヴァ版とマルコの手になるヴェネツィア版の  
二つが想定され得る、との見方が改めて示されたことであろう。ただ、その

ヴェネツィア版とは、バルデッリ・ポーニがPとRとしたのに対して、彼はFGとした。Rについては特に論じていないが、FGを本人による改訂版とする限り、Rの新記事は後世の加筆ということにならざるを得ない（本文では特に触れられていないが、註ではそのことを認めている）。

#### ＜ユール 1871＞

これらマースデンに始まる近代マルコ・ポーロ研究を集大成したのが、1871年詳細極まりない註を付けた記念碑的な大著を出版したイギリスの外交官にして東洋学者ユールであった<sup>60</sup>。その英訳には、Fのフランス語が余りにもひどいものだったためこれを採らず、ポーチェのFGテキストを主底本とし、FとRから補った。

彼も、Fが最も古く、オリジナルでなければそれに極めて近いコピーであることを認める。そこに使われているフランス語が粗雑なものであること、あらゆる種類の文法的誤り、イタリア語の多用、東洋語の混在等々、それらがかえってトスカナ人作家と東洋化した旅行者というどちらもフランス語によく通じていない者によって書かれたことを示している。その他口述のままの表現のあること、文体の釣合のとれていないこと、繰り返しの多いこと、綴にゆれのあること等は、口述が校訂されていないことを示す。したがってそれはマルコの話し言葉の文字どおりの筆記か、でなければ下書きで、後で見直そうとしてそのままになったものであるろう、とみる。一方、他の版ではそうした特徴や欠陥が適度に修正されていることから、Fが先行写本、共通の祖本であったことが分かる。ユールは、旅行中のメモやノートのことには余り触れていないが、当時一般人が自ら筆をとる習慣はなく、ハイトン、オドリーコ、コンティ、バットゥータらの作品が全て口述筆記であったことを指摘する。

そしてユールは、ヨーロッパ各地の図書館を調査して八十五の写本を確認し、それらを四つの系統に分けた。(1)は地理学会版Fで、Tはそれからの派生。(2)はFGに代表される他のフランス語テキスト。Fとかなりの異なりが認められるが、その異なりは表面的なものであり、かえって劣っている箇所もあることからして、後世の手になる標準フランス語への単なる訳である。(3)はピピーノのラテン語版で、Tと共通するところの多いことから、その原本は何らかのイタリア語版である。これにもマルコの手は加わっていない。そして(4)がRで、三巻への分割や同じ章が欠落していることから、Pが底本の一つとして用いられたことは明らかであるが、そこに含まれる多くの新しい記事は、例えばアフマド事件のごとく、マルコでなければ書けないような類のものであり、したがってそれは解放後のヴェネツィアで、ジェノヴァに持って行かなかった資料つまり父と叔父のノートに基づいてマルコ自身によって加えられ、そして後に生前かたぶん死後にラテン語訳されたものである。それが、ラムージョが使ったと述べているところのギジ家写本であり、したがってそれを発見することの重要性を指摘した。ルスティケッロについ

てはそれまでの紹介に留まり、前述のごとく、英王室との関係を明確に否定し、エリー・ド・ボロンとの混同を指摘した以外特に新しいものはない。

以上のようにユールは、マルコのテキストにまつわる多くの問題を、ほぼ全ての点で今からみても妥当な形で解きあかし、今後取り組む方向を示していた。そして事実、彼によって緊急の課題とされたそのギジ家写本の兄弟版の発見によって、マルコ・ポーロ研究は新たな展開を遂げることになるのである。

#### ＜コルディエ 1903-20＞

後にユールの改訂版(1903-20年)を出したコルディエは、その補注で、ヴェネツィアのドージェ・マリーノ・ファリエーロの遺品の中に旅行記の二種類の写本があり、一つはマルコの自筆稿で、もう一つは細密画入りのものであったとの記録(1351年)を紹介し、ルスティケッロによる物語的なフランス語訳写本以外に、マルコ自身の手になる商業用の草稿が存在していた可能性を示唆していた<sup>61</sup>。これは、オリジナルに二つの版を想定する必要のあることを、従来のごとくジェノヴァ版と解放後のヴェネツィア版ではなく、ジェノヴァ以前のヴェネツィア版と獄中でのジェノヴァ版という、また違った形で提起したものであった。

#### ＜ペラエズ 1906＞

十九世紀最後の年の1900年、新たなヴェネツィア語手稿現カサナテンセ断片(VA<sup>1</sup>)がルッカの古本屋で発見された。断片ではあったが、その写本は十四世紀始めの数十年に作成されたと見られる、FやTAに劣らぬ古いものだった。1906年そのテキストを校訂し印刷に付したペラエズは<sup>62</sup>、まずそれまで知られていた五つのヴェネト語テキストのうちルッカ稿本(1496年)と対校し、それよりも古く、内容が豊かによく揃っていることを見出した。次にそれまでに刊本となっていた四種のラテン語版(パリ地理学会のラテン語版(LT)と三種のピピーノ・テキスト)と対校し、そのどれとも異なり、全体としてより豊かであることを確認した。したがってそれは、Pから派生したものではありえない。次に、二つのフランス語テキストと対校し、FGとは大きく異なるのに対して、Fとはよく一致し、多くの場合その要約とみなし得ることを確証し、したがってこのヴェネト語断片がFに派生するものであることを証明した。かくて、ずっと以前から疑問視されてはいたが、ヴェネト語原語説もほぼ否定されるところとなった。

#### ＜オリヴィエーリ 1912＞

1912年トスカナ語版「オッティモ」を再版したオリヴィエーリは、今や決定版となった感のあるユールの説を全面的に認める<sup>63</sup>。マルコが口述し、ルスティケッロがそれをフランス語で筆記したこと、オリジナルに最も近いのはFであること、1307年にティボーに贈られたコピーは、マルコの手が加わっているがそのテキストはFより優れているわけではないこと、その他の写本は全てもっぱらFに由来すること、Rの新記事は、マルコが晩年に書き

加えたもので、それが集められてラテン語訳されていたのを、後にラムージョが発見してイタリア語に訳したものであること、などである。

彼によれば、イタリア語テキストの中では最も信頼できるのはやはり「オッティモ」であるが、それが遅くとも1309年以前という早い時期に作られたものであるにもかかわらず、オリジナルから直接訳されたものではなく、その間には二つの中間写本が介在すると考えねばならない。一つはトスカナ語写本グループ(T)の祖本と見なすべきもの、もう一つはPとヴェネト語写本のグループ(V)の祖本となったものである。そして両グループのテキストを対校してみると、多くの場合後者の方が豊かであることが分かる。またTとFを対校すると、大抵の場合Fの方が豊かであるが、いくつかの箇所ではTの方が良好であることを指摘した。しかし彼は、それらが全体としてどのような関係にあるのかは明らかにしなかった。オリヴィエーリの系譜関係の解明は、次に現れるベネデットと較べると極めて不十分なものであった。

#### <シャリニョン 1924-28, 馮1936>

[1924年、ポーチェのテキストがシャリニョン(紗海昂)によって近代フランス語訳されて、北京で出版された。彼はそのタイトルに、「1295年著者の口述に基づいてルスティシャン・ド・ピズによってフランス語で編まれ、1307年マルコ・ポーロ自身によって見直され訂正された」と記していた。そのテキストからさらに馮承鈞によって中国語訳されて、1936年「馬可波羅行紀」として中華書局から出版された。]

### 3.2 ベネデット

#### <ベネデット 1928>

そしてユールから四十年、その予言どおり、ラムージョに用いられたギジ家本の兄弟版とみられるセラダ稿本(Z)のコピー(Z<sup>1</sup>)をミラーノのアンブロジーナ図書館に見出し、それに基づいて従来の説を大きく覆したのがフィレンツェの中世文献学者ベネデットであった。彼は、ヨーロッパ各国に散らばるまだ埋もれたままの写本を組織的に発掘したのみならず、それら百五十近い現存写本を厳密に対校し、その系譜関係を体系的に確定することによって、マルコ・ポーロテキスト研究のまさに基礎を築いた。その詳細精緻極まる研究「写本の伝統」を序とし、新たに自ら校訂したFつまりfr. 1116テキストに、それにはない記事をZ(Z<sup>1</sup>)・Rその他いくつかの代表的写本から脚注に補って出版したのが1928年の大著である<sup>64</sup>。以後のマルコ・ポーロ研究は全て、その写本研究と彼の校註になるFテキストを出発点とすることとなる。

ベネデットの多岐にわたる膨大にして緻密な研究を簡単にまとめることは容易ではないが、その骨子は、Fはオリジナルではなくそれ以前の段階があり、ジェノヴァで作られた原本には、ZとRのみのもも含めて全ての記事が含まれていた、今に残る写本は全てその今は失われた原本から中間写本を

介在して派生し、その間に漸進的縮小・貧困化の過程をたどった、つまり全ての記事を含んだもっとも豊かなものであった祖本から、次々と転写される過程で削減され改変されて、今に見られるような内容しかとどめなくなった、というものであった。

ベネデットのこの結論は、三段階の綿密な検証から導かれる。まず彼は、ルスティケッロの騎士物語と旅行記のそれぞれの最も古いパリ国立図書館写本fr. 1463とfr. 1116を照合して、前章に見たごとく、両者の文体や表現・語句が序文冒頭の文章のみならず全体的によく一致することから、fr. 1116が部分的にではなく全面的にルスティケッロの手になるものであることを導き出す。次に、従来の諸家においてFがジェノヴァで作成されたオリジナルそのものか極めてそれに近い忠実なコピーと見なされたのに対して、FとFG・TA・VAらのテキストを対校してみると、内容的に基本的に一致する一方、多くの部分においてFの方が豊かで古い形を示し、他の写本では省略されたり要約されたりして簡略化された形をとどめていることから、それら写本がFの兄弟写本から派生したことは明らかであるが、しかし少ないながらもいくつかの箇所ではFにはない語句や文を残していたり、より古い優れた形をとどめていたり、Fが誤っていて他が正しい箇所のあることからして、Fはオリジナルではなく、それらに共通する祖本のあったことを想定しなければならない、と結ぶ<sup>65</sup>。そして最後にFとZ（アンブロジーナ写本）<sup>66</sup>を対校すると、Zが、Fと兄弟関係にあるがそれよりもはっきりと優れたフランク・イタリア語（彼はFのフランス語をこのように呼ぶ）写本からラテン語訳されたものであることが証明される一方、内容的には、Zの兄弟本であるギジ写本からの記事をイタリア語訳して採り入れているRから周知のごとく、約二百の箇所においてFにない記事を含んでいる。以上から、ZとR（その底本となったギジ写本）の祖本もフランク・イタリア語版であり、したがってそれはF・T・V等をも含めた全てに共通する祖本と考えられなければならない、と結論した。<sup>67</sup>

ではその祖本はどのように作られたか。前述のごとく、騎士物語と旅行記の最も古い二つの写本が全く同じ文体で書かれていることからして、それまで考えられていたごとくマルコがヴェネツィア方言で口述し、それをルスティケッロが急いで筆記していったからあのような奇妙なフランス語になったわけではなく、旅行記の文体も騎士物語のそれと同じく作家ルスティケッロ固有のものであり、彼はマルコから提供された書かれた記録に基づいて、しかも十分な時間の中でそれを自分のフランス語で編んだに違いない。次に、上に述べたごとく後の諸稿本がFやZも含めてどれも何らか不完全な形を示し、全て揃った祖本が想定されなければならないことからして、それは口述やメモ程度の筆記資料から形成されることは難しく、かなり完成度の高い草稿と呼べるようなものに基づいたと考えなければならない。そしてベネデットは、その草稿をこそオリジナル(0)と呼ぶべきだとする。

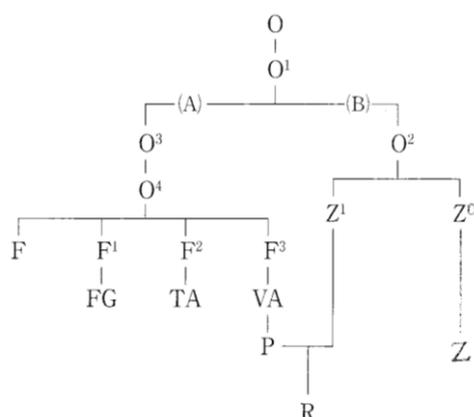
ではそれは何語で書かれていたか。彼は慎重に断定を避けているが、Fにはヴェネト語が混じっていることを認めつつ、やはりフランス語、ただし東方交易に従事する「レヴァント人のフランス語」であった可能性が高いとみなす。そしてルスティケッロの仕事とは、「かくも長く東方に暮らして、西方のいかなる言語でも正確に表現することができないと感じていたマルコのその記録を、受け容れられ得る文学語で編むこと」<sup>68</sup>だった。彼がそれに付け加えることが出来たのは、「つなぎの文句とか会話の台詞とか戦闘場面の描写」だけである。つまりベネデットによれば、ルスティケッロの役割は、おそらく主にフランス語とそれにヴェネト語の混じった形で認められていたであろうマルコの膨大な草稿を、一卷の書物にまとめ書き留めることにすぎなかった。フランス語が選ばれたのは、どの地域のイタリア語もまだ文章語として完成の域に達していなかったのと、フランス語の方が国際的でより多くの読者を想定できたからである。つまりベネデットは、自分を何か偉大なものを求めてさまよう騎士のように感じていたマルコが、どのようにしてかともかくジェノヴァの獄で出会った、騎士物語作家であったルスティケッロを、自分の書を世に出すために編者に選んだのであり、そうした文体で編むことを許したのもそのためである、と考える。

そして彼は、主要写本の系譜関係を次のように位置づけた。マルコの自筆稿を0、ジェノヴァで作成された直接ルスティケッロの手になる祖本を0<sup>1</sup>とすると、周知のごとくF・T系写本グループ(A)とR・Z系写本グループ(B)とでは記事に大きな異なりがあるから、それらは共に0<sup>1</sup>から直接派生したものではなく、0<sup>1</sup>とそれらの間にそれぞれの第二次祖本0<sup>2</sup>と0<sup>3</sup>を想定しなければならない。Z（セラダ写本）とR（ギジ写本）は0<sup>2</sup>から直接派生したと考えるもいいのに対して、F・Tグループは内容的にそれらより劣っていることから、0<sup>3</sup>とそれらとの間にさらに第三次祖本0<sup>4</sup>が想定される。それから派生したFとその兄弟写本F<sup>1</sup>・F<sup>2</sup>・F<sup>3</sup>からそれぞれFG・TA・VAとPが派生したのである(図Ⅲ-2 系譜図)。

とすると、RやZにあってFやTにない記事についてはしたがって、後にヴェネツィアで書き加えられたものではなく、ジェノヴァの祖本からあったものが、0<sup>1</sup>からFに至る過程、つまり0<sup>3</sup>・0<sup>4</sup>・…・0<sup>n</sup>と次々と転写されたどこかの段階で抜け落ちたもの、ということになる。解放後のヴェネツィア版が存在しないことは、もちろん言うまでもない。逆に、FにあってZにない箇所については、Zの翻訳者あるいは写字生が「省略する」とはっきり記しているから、問題はない。

ベネデットはまた、1932年にはFを主底本としZ・R・T・Vなどの主要テキストからオリジナルと推定される記事を補って祖本0<sup>1</sup>の復元を試み、それをイタリア語版で発表した。その序文でも自説をさらに強め、マルコを「唯一の真の著者」と呼んでいる<sup>69</sup>。彼のこのイタリア語集成訳はすぐリッチによって英訳され、さらにその英訳から愛宕によって日本語訳された。<sup>70</sup>

[以上の主要テキストの系譜関係を簡単に図示すると以下のごとくになるか。Oは、ポーロの話し・メモ・ノート、持ち帰った書き物、ルスティケッロの許にあった書や情報、その他祖本の材料となった全ての原資料、O<sup>1</sup>はマルコとルスティケッロによって編まれた原本、Z<sup>0</sup>はZの祖本、Z<sup>1</sup>はギジ写本、F<sup>1</sup>・F<sup>2</sup>・F<sup>3</sup>は、Fの兄弟写本でそれぞれFG・TA・VAの祖本となった稿本。]



図V-2 テキスト系統樹

### 3.3 ベネデット以後

#### <ペンザー 1928>

以後の議論は、このベネデットの研究と論説をめぐって展開されることになる。例えば早くも翌1928年、フランプトンの英語版<sup>71</sup>を再版したペンザーは、その解説でベネデットの研究を全面的に支持し、「マルコ・ポーロ写本の迷宮に導きの糸を通した」、カオスを秩序に変えたと讃えた。<sup>72</sup>

しかしベネデットの説のうち、口述筆記ではなくかなり詳しい草稿に基づいたであろうこと、諸写本間の系譜関係、Fはオリジナルではなくそれに先立つ段階を想定しなければならないこと、などは広く受け入れられたが、草稿の完成度や二人の間で使われた言語、祖本の成立過程とルスティケッロの役割などについては大いに議論の余地が有り得た。

#### <オルランディーニ 1926>

その少し前の1926年、ヴェネツィアの古文書庫に眠っていたポーロ家に関する古記録を多数発掘し、それを出版して彼らの生涯・家族・家屋・財産等に関する研究を基礎づけたのが同市国立古文書館のオルランディーニであった。彼は、それら記録から窺われる限りマルコの旅は冒険的・物語的な性格のものではなく、全く商業的なもので、彼が獄中に携えていたという資料にしても、代々東方交易商人であったポーロ家に伝わっていたり、前回の東方行で父や叔父が記していたものであって、それら資料に基づいてルスティケ

ッロが大いに潤色して騎士物語的なものに仕上げたのであろう、と見た。つまり、商業的記録やその土地土地での観察以外の、全体的構成や物語的部分は、ルスティケッロの手になるものであろうと示唆していた<sup>73</sup>。この見解は、それまでではルスティケッロの役割を最も高く評価したものとして注目される。また、ラムージョ以来の伝統となっていた、ともすればその旅を英雄的なものとして美化し、オリエントの「発見」者としてマルコを偉大化しようとするヨーロッパ人の傾向に冷静な見方を対置したものであった。

#### <ムール 1938>

ユールとベネデット以来焦点となっていたセラダ写本 (Z) そのものが、1932年12月トレドでパーシヴァル・デーヴィッド卿によって発見された。1938年にその復刻版を、翌年にはFを主底本としそのZを始めとする十七の主たる写本・刊本から集成した英語訳を出したムールは、Zが現存するどれよりも優れたロマンス語テキストからのラテン語訳写本であること、また省略のない後半部はFとよく一致することを認め、したがってオリジナルに関するベネデットの説を支持した<sup>74</sup>。しかし用いられた言語については、ポーロ家と個人的に面識があったと見られるピピーノが、はっきりとロンバルディア方言から訳したと言っていること、Zもフランス語よりイタリア語の影響をとどめており、固有名詞にはヴェネト語の影響がみられることなどから、若干の留保を置いた。それでも、Fがオリジナルに最も近いことには変わりなく、また口述だけによるのではなく、主に書かれた記録に基づいて作られたものであることは多くの語句・表現から明らかである、と言う。

FにあってZにない部分は、Zにはっきりと省略する旨の但し書きや<etc>となっているところのあることから、訳者あるいは写字生によって意図的に短縮・省略されたものであることが分かる。双方に共にみられる部分については、形式・内容ともFとよく一致し、したがってZの訳者がそれらに共通する祖本を前にしていたことは確かである。一方Fにない約二百箇所、さらにその内RにもなくZにのみ見られる八十箇所についても、ウィグリスタン (§63)・福建のキリスト教徒 (§171)・ロシア (§234) など、長く東方に旅したマルコにしか書けないような詳細で貴重な記事を含んでいることから、オリジナルの段階からあったものと考えてよいことをムールは支持した。それらがFなどでは抜け落ちて行ったのは、後の写字生が信用しなかったこと、宗教的配慮、興味の欠如等が原因であろう、と言う。しかしルスティケッロの役割については、マルコを「唯一の真の著者」とするベネデットの見解には疑問を呈し、全体の形式、物語的部分、教皇使節という役回りなどはルスティケッロによるとするオルランディーニ説の支持に傾いている。また、全ての記事がオリジナルからあったとするのは難しく、誰によってどのような形でかはともかく、後に書き加えられたと考えざるを得ない記事のあることも認める。

#### <アッルツリ 1954>

1954年マルコ・ポーロ生誕七百年を記念して出版された多くの書の一つであるアッルッリの版は、オリヴィエーリの「オッティモ」を別のトスカナ語写本TA<sup>3</sup>で補ったものであったが、その解説の中でベネデットの説に対するちょっとした疑問を提出していた。Zにのみ見られる章がPやFに欠けているのは宗教的理由から省かれたものであるとすれば、Fには他にも同様な記事がたくさん残っているのはどう解釈すべきか、また宗教とは直接関わりないカタイやグラン・カンについての多くの章が省略されているのは何故か、というもっともなものであった。<sup>75</sup>

#### <ラーサム 1958>

1958年にベネデット版のFにZを加えて英訳したラーサムも、ベネデットの論を大筋において認める<sup>76</sup>。オリジナルがフランス語で書かれたこと、ZもFに先立つフランス語テキストからのラテン語訳であること。Zのみの記事についても、それらがジェノヴァで作られたオリジナルの一部をなしていたことを疑うべき理由はない、と言う。そのことから逆に、後のどの写本にも残っていないオリジナル記事のあったことも考えられ、しばしばマルコの旅そのものを疑問視する根拠とされる、茶・印刷術・万里の長城などの欠落もそうした経過をたどったのかもしれない、と推測する。

一方、ルスティケッロについては、ベネデットの評価は余りにも厳しいと弁護する。ベネデットは、冒頭の句のみならず全体がルスティケッロの文体であることを証明しながら、その短所ばかりをルスティケッロのせいにするが、そのためこの共同作業におけるルスティケッロの役割も過小評価されてきた。退屈な地理案内や商業案内の中にちりばめられた中世の伝説、バグダッドの動く山の奇跡、マーギの王、アラムートの山の老人の天国、戦闘場面、フビライ宮廷でのマルコの活躍、帰国時の役割、性への興味、驚くべきことどもへの情熱などは、マルコよりルスティケッロに帰せられるべきものである。いずれにしてもルスティケッロの助けなしにマルコの成功はなかったどころか、同書の誕生すらみなかったであろう、と。

#### <ガッロ 1955>

これらに対して、ベネデットの研究を踏まえつつ、テキストの成立過程に関して新たな説を提示したのが、ポーロに関する記録をさらに多く発掘し、マルコをめぐる諸問題を別の角度から検討したガッロであった(1955年)<sup>77</sup>。彼は、マルコがその書の中で述べている、東洋の四か国語の読み書きができたこと、グラン・カンの使節として諸地に派遣されたとの記事を信頼し、マルコはその報告書の写しや下書きを取っておいたに違いなく、それがかの書の成立に大いに役立ったであろうと考える。報告書そのものはモンゴル語かペルシャ語か他の言語に訳されて提出されたであろうが、その下書きあるいは草稿は、ベネデットが想像したごとくフランス語ではなく、中国滞在中も家族間で用いられたであろうヴェネト語で書かれていたに違いない。そしてその下書きや草稿をこそ、オリジナル・テキスト(第一次ヴェネツィ

ア版)と呼ぶべきであると言う。もちろんそれだけではなく、旅行中にポーロたちが取っていた多くのメモやノートがあり、ルスティケッロは大部分それらをそのままフランス語に訳すことしかしなかった、それに少し文学的装飾を施しただけである。こうして成ったのが、ルスティケッロのジェノヴァ版である。口述もヴェネツィア方言で行われたであろうが、その投獄期間の短さ(ガッロはクルツォラ海戦(1298.9.8)による捕虜とのラムージョ説を支持する)からして、新たに本を書く時間はなかったはずである。

とすると、その草稿がフランス語ではなくヴェネト語であるとする点以外、ここまではベネデットとほぼ同じである。異なるのは、解放後のヴェネツィアでのマルコの動きとピピーノのラテン語版の位置づけである。前述のごとくベネデットは、最初にジェノヴァで全てを含んだものが完成され、その後マルコ自身によって書き加えられることはなかった、としていた。したがってピピーノのラテン語版は、Fと兄弟だがそれより劣る一フランク-イタリア語写本(F<sup>3</sup>)のヴェネト語訳(VA)からさらにラテン語に訳されたものとされていた。

これに対してガッロは、Pの「序文」からしてピピーノはマルコを個人的に識っており、自分のラテン語訳に用いた原稿を直接マルコからか、自分の所属する教団ドメニコ会の筋を通じてもらったのであろう、と推測する。その原稿は解放後のマルコがヴェネツィアで見直し書き加えたもので、内容的にさらに豊かになっていたし、もちろんヴェネト語で書かれていた。マルコからは、自分の作品を全世界に広めるためにラテン語に訳してもらうべく自らこのボローニアの博識の修道士に与えたものだった。したがってこれの方こそ決定版(第二次ヴェネツィア版)と呼ぶべきであり、著者マルコの考えや観察がより正しく表されている。ピピーノはしかしそれを全て忠実に翻訳したわけではなかった。主に宗教的観点から記事を取捨選択し、削除・要約したり、語句・表現に配慮したりし、また自らの改変もいくらか加えながらラテン語に直したのだった。このピピーノによって採られなかったマルコの文章は、第二次原稿からの一ヴェネト語写本であるソランツィアーノ手稿(V)<sup>78</sup>と一ラテン語要約(L)に残っている。ラムージョが利用したギジ家写本とZの祖本もルスティケッロのフランス語版ではなくこの第二次ヴェネツィア版であり、Fにはない多くの記事を含んでいるのもそのためである、と。

つまりガッロによれば、原初のヴェネト語草稿やそれに基づいたFからではなく、解放後マルコ自身によって見直され訂正され追加された改訂版から、宗教界や知識人のためにピピーノによってラテン語訳されたのがPであり、これの方が決定版である。それに対してFは、マルコが口述で補ったにせよヴェネト語で書いてあった最初の草稿に基づいてルスティケッロが騎士物語の読者のためにフランス語に訳した一翻訳にすぎない。この方がむしろ、マルコのオリジナル草稿を削除したり改編したりして歪めたものである。ピピーノのラテン語版がルスティケッロのフランス語版と異なるのはそのため

ある。とすると、Pの位置づけについてはガッロの説は、それを第一次ヴェネツィア版としたバルデッリ-ポーニの説と似ていることになる。

Pは確かにFやTと大きく異なる部分もあるが、基本的にはよく一致し、内容的にはFより劣るが同系統の後次の段階の写本からラテン語に訳されたものであることを示しており、一方それに比して、ZやRとの異なりをもつばらピーノの選択に帰すには、その隔たりは余りにも大きなものであった。それに、L・VはZ・RよりはFに近く、同じ第二次ヴェネツィア版からであるとすれば、ZやRと大きく異なることがうまく説明できないくらいがあった。しかしオリジナルに関しては、最初にジェノヴァで作成されたものに全てが含まれていたとするベネデットの説に異議を唱え、バルデッリ-ポーニやポーチェとは別の形でオリジナルに複数の段階を想定する考え方が注目された。もっとも、RやFGではなくPを解放後の改訂版とする点で異なるが。また彼は、F登場以来主流を形成してきたフランス語説に替えて、草稿も口述もヴェネト語で行われたに違いないことを強調し、ルスティケッロはフランス語をよくする作家であったからフランス語で書いたのであって、彼らの間でヴェネト語での意志の疎通に障害があったとは考えない。

#### ＜ボルランディ 1962＞

この説をさらに別の形で発展させたのがボルランディである(1962年)<sup>79</sup>。彼も、Fがルスティケッロによって最初に作成されたテキストに最も近いものと考えられることから出発する。しかしFの地名の表記法を分析してみると、同じ音価が地の文ではフランス語の発音どおりに使われているのに対して、地名ではそれにイタリア語綴りが用いられていることから、Fは口述ではなく書かれた資料に基づいて作られ、しかもその資料は何らかのイタリア語おそらくヴェネト語で書かれていたであろうと結論する。

次に全234章を、その内容によって1.序章(19)、2.歴史と伝説(39)、3.雑記(39)、4.商業(107)に分け、全体の約半分を占めるその商業的記述の部分を当時の商業実務案内、とりわけペゴロッチのそれと比較検討し、その形式と内容が極めてよく一致することから、父・叔父・マルコら三人によって書かれたかなり完成度の高い東方交易案内用の草稿が存在していたであろうと推定する<sup>80</sup>。この点では、言語についてはフランス語とヴェネト語の違いはあるが、マルコに草稿があり、ルスティケッロはそれを単に書き直しただけとするベネデットと一致する。

そして、この補囚前のヴェネツィア版をオリジナルと呼び、コルディエの指摘した商業版に当たる、と言う。また、メオ・チェッフオーニの要約に記されている、「その書は、誰でも読めるようリアルトに鎖で止められていた」というエピソードを紹介し<sup>81</sup>、これはルスティケッロによる空想的なフランス語版ではなく、マルコによって直接手書きされた商業版で、まだ改訂されていない方であると言う。こうして彼は、その商人性を否定してマルコを何か遍歴する騎士か偉大な探検家のように祭り上げようとするオルシュ

キやベネデットに疑問を呈し、その書の基本的性格は何よりも商業案内であったと言う。

しかしルスティケッロはそれを全て忠実にフランス語に翻訳したわけではなく、物語作家であった彼は、そうした実務的内容に馴染めず、多くの箇所では部分的あるいは全体的に省略したり、簡略化したり、一般的表現に変えたり、それに何よりも騎士物語的な文体や表現を持ち込んだ。また全体的構成に配慮したのも彼で、序章に当たる最初の十九章は元のマルコの草稿にはなかったであろうし、出発時や帰国時にみられるごとく、マルコたちに貴族か使節か何か偉い人物のような役回りをさせるよう演出した。こうして出来上がったのがF、つまりルスティケッロによるフランス語訳（ジェノヴァ版）である。Fが商業案内としては中途半端なものに終わる一方、他の魅力的な性格を合わせ持つようになったのもそのためである。

さらに興味深いのは、そのマルコの草稿がルスティケッロの手に渡った経過をめぐるとの見解である。それは、ラムージョに始まりその後全ての論者に受け継がれてきたごとく、獄中のマルコがわざわざヴェネツィアから取り寄せたのではなく、1295年に帰国後いつかの時点で（おそらく翌1296年）<sup>82</sup>、何らかの目的で再び東方に向かったおりその交易のマニュアルとして携えていたのが、その途中ジェノヴァの船に捕まったがためその獄に持って行くはめとなったもので、何かの機会にそれを目にして興味を示し、翻訳の許しを求めたのがルスティケッロである。そしてジェノヴァではそれを核として、マルコと対話しつつ共同作業が進められたのだ、と言う。つまり、もしマルコがそのそうしたノートを最初から携えていなければ、かの書の成立もなかったであろう、というわけである。

残りの部分については、例えばセイロン島について章が離れて二つあり、一つ(§190)が同島の位置・支配者・宗教・産物など商売に役立つ実務ガイドであるのに対して、もう一つ(§195)は有名なソガモニ・ボルカンつまり釈迦牟尼仏陀にまつわる伝説の紹介である。他にもそうした例の多いところから、もっぱら商業案内だけであった草稿の他に、諸地の歴史と伝説、驚異譚その他雑多な事項を記したもう一つの典拠があったのではないかと疑う。その典拠が前者と同じようにマルコによってすでに用意されていたものか、それとも獄中でルスティケッロと対話する中で形成されたものか、ボルランディは断定を避けているが、どのような経過をたどったかは確定できないにせよジェノヴァの獄にはあり、ルスティケッロの手に入った。この二つの典拠を基にピーサの物語作家がフランス語で編んだのがFである。彼のテキストが、商業案内と物語という相反する二つの性格を有するようになったのはそのためである。RやZにのみ見られる記事については何も触れていないが、以上からすれば、解放後のヴェネツィアで書き加えられたのではなく、その典拠のどちらかにはあったが、ルスティケッロによって採用されなかったがため少なくともFには入っていない、ということになる。 <sup>83</sup>

#### ＜ベルトルツィーピッツォルツォ 1975＞

1975年ヴァレリア・ベルトルツィーピッツォルツォは、それまでクルスカ・アカデミーから与えられた「オッティモ」の称号ゆえにトスカナ語テキストの中では絶対的な権威を獲得し、バルデッリ-ボーニに始まってバルトリ、オリヴィエーリその他と繰り返して刊行されてきた<sup>84</sup>写本TA<sup>1</sup>(フィレンツェ国立図書館Ms. II. IV. 88)ではなく、それに対するベネデットの批判<sup>85</sup>に基づいて、もう一つのトスカナ語写本TA<sup>2</sup>(同Ms. II. IV. 136)のほうがより優れていることを実証し、カルドーナの手になる浩瀚な註とともにそれを出版した<sup>86</sup>。その中で彼女は、二人の共同作業が実際にどのように行われたかは全く分からないとしながらも、その豊富なデータからして書かれたものに依らずしては不可能であり、それら資料は、代々東方交易商人であったポーロ家に伝わっていたものや、最初の東方行のおり父と叔父が次の旅行の用意に書いておいたものと、そして中国でのマルコのメモから成り立っていたであろう、と推測する。Fのルスティケッロのフランス語の中に多くのヴェネツィア方言の特徴が残っていることから、それらは主に母語ヴェネト語によって、あるいは混合した言語で書かれていた。またFが、あの堂々とした書き出しに比べてその終わり方が言語上でも形式上でもあのように不完全な形になっているのは、マルコの解放<sup>87</sup>により最後の校閲ができなくなったためであろう、と推測する。

ルスティケッロはこれを騎士物語に似せて冒険文学的なものに仕上げようとしたが、出来上がったものがそうした枠に収まらない通商案内・旅行案内・民族誌・外交報告・文化論等の多様な性格を備えていたため、それが後の諸版のアプローチの違いとなって現れてくる。つまり、当時の新興階級だったトスカナの商人階層によって求められたのがT、ヴェネツィアの交易商人向けがV、貴族階級向けがFG、宗教界向けがPとなっていた。彼女の分析はもっぱらトスカナ語諸写本間に限られているため、ZとRの問題については特に取り上げていない。

#### ＜ロンキ、セグレ 1982＞

1982年ロンキは、新たに自ら校註したfr. 1116のテキストとベルトルツィーピッツォルツォのTA<sup>2</sup>テキストを合わせて再版した<sup>88</sup>。その版に序文を寄せたセグレは、基本的にはルスティケッロがマルコのメモや回想記に基づいてフランク-イタリア語で書き、マルコがさらに口頭でそれを補ったのであろうが、二人の共同作業は、商業的・記録的側面はマルコ、物語的・伝説的側面はルスティケッロというふうに、従来考えられてきたほど分業的なものではなく、両者の知識と個性がぶつかり合う中からあの作品が誕生したと見る。ルスティケッロも東方の生活や自然にその想像力を駆使し、マルコもまた自分が目にしたアジアの社会や歴史を西方で語られていた知識でモデル化して説明した。事実と空想、現実と伝説に対する両者の対照的な方向からの取り組みの中から緊密な統一が生まれた。それから様々に異なった版が生

まれたのは、マルコとルスティケッロの作品がそうした多様な性格を備えていたからである。そうした総合的な意味での地誌、その名のとおり「世界の記」であり、地理的側面で当時の水準をはるかに越えると同時に、その物語的側面は今なお魅力を保っていると讃えた<sup>89</sup>。とすればルスティケッロは、筆録者といわんよりはほとんど共著者である。

#### <クリッチリー 1992>

はたして著者は誰かと言うこの問題を、最も近く取り上げたのはクリッチリーである(1992年)<sup>90</sup>。彼は、Fに関する従来の説を一応認めたくて、まずルスティケッロの介在を疑ってかかることから始める。ピピーノは「俗語」から訳したとっており、それはフランス語ではなくロンバルディア語かヴェネト語で、マルコが最初それで草稿を書いていた可能性は高い。が、それが自筆だったか誰かに書かせたものかは分からない。一方ルスティケッロにしても、マルコと共にジェノヴァの獄にいたと書いたのは、その騎士物語にエドワードの名を借りたと同じく、自分のテキストに権威を与えるための創作だったかも知れない。しかしそれでも、他の多くの条件からすれば、ルスティケッロが最初から係わっていた可能性の方が高い。何よりも、マルコのような人間が、時間と筆記者を持たなければどうして本を書くようなことができたかを想像してみれば分かる。が、草稿のみに基づいたとすることは困難で、従来から指摘されたごとく口述そのままの文章も非常に多い。

一方では、最後の章のトクタイとノガイの戦いのように明らかに後世の追加とせざるを得ない箇所も多く、また同一のことを指すのに用いられている語句や表現にばらつきがあり、したがって今に伝わっているようなFは全てルスティケッロの手になるものとは言えない。語句をコンピュータ分析した結果、言語的特徴はほぼ前半と後半(Pだと1・2巻と3巻)の二つに分かれ、1298年のジェノヴァで一度に書かれたものとは言えなくなる。つまり、ゴーストライターが一人だけだったとは限らない。Fがオリジナルであればフランス語で書かれたことになるが、マルコはフランス語を知らなかっただろうし、Fにはヴェネツィア方言も多いことからして、そのノートはヴェネト語で書かれていたであろう。そのノートをオリジナルとすれば、Fはその訳ということになる。が同時に、マルコがヴェネト語で語り、ルスティケッロがそれをフランス語に訳すという形も平行したはずである。騎士物語作家としてのルスティケッロの影響は大きく、そのことはFの文体や表現に明らかである。しかし、例の「序文」の書き出しや類型的な表現は当時の他の作家の作品にも見出され、必ずしもルスティケッロだけのものではなく、したがってあの文章だけから二人を同一人物と断定することはできないと、疑問を呈する。また、マルコが商人でこの書が商業案内であることは様々な点から窺われるが、当時の商業案内にボルランディの主張するとき一定の様式というのはなかった、と反論する。さらにまた、後に父と叔父その他の人々によって、あるいはそのノートをもとにマルコによって直接追加されたと考え

るをえない部分のあることも認める。

マルコ・ポーロのテキストとその成立過程をめぐる議論は、その登場からちょうど七百年、そしてラムージオから四百四十年を経て、かくて再び振り出しに戻ったかの感がある。

### 3 ルスティケッロの謎

マルコ・ポーロ旅行記は中世のベストセラーの一つだったと言う。近代でもそうであった。そして七世紀たった今でも、各国で次々と刊行される。その数は当時のものではアーサー王ものに次ぎ、『神曲』『デカメロン』『カンタベリー物語』の三大文学にまさる。にもかかわらずその書は、ユールによれば「大いなる謎の書」<sup>91</sup>である。十三世紀末中世も明けようという比較的新しい時代に成ったものでもあるにもかかわらず、ベネデットによれば百五十近くに上る現存写本のうち一つとして同じものはなく、そのテキストの歴史は「およそ想像もできぬほど複雑にもつれた糸さながら」<sup>92</sup>である。その謎は、今なお繰り返されるそもそもマルコの旅そのものへの疑惑に始まり、上にたどったごとく幻のオリジナルをも含めてあらゆる点に及ぶ<sup>93</sup>。ルスティケッロもまた、その謎の大きな一つである。しかも彼は、アーサー王物語の作家でもあった。

#### 1 旅行記の謎

1824年Fの登場と共に、そのいかにも口述筆記を連想さす極めてイタリア語がかったフランス語、練られたとはいえない文体、いたるところにみられる話し言葉そのままの表現、地名や人名の不統一と誤り、整っているとはいえない全体の構成、中途半端な終わり方、アーサー王騎士物語作家との同等々から、Fそのものが1298年にジェノヴァの獄で作成されたオリジナルかそれに極めて近いコピーと考えられた。もちろん全てが口述によるわけではなく、マルコたちが旅行から持ち帰ったメモやノートが用いられたであろうが、それらもやはり不完全ではあってもフランス語で書かれていたであろうと想像された。論者たちは一様に、当時フランス語がいかに広く普及していたかを、同時代のブルネット・ラティーニやマルティーノ・ダ・カナレ、ハイトンら数々の例を引き合いに出して論じた。東方交易商人であったポーロたちも、そのリングア・フランカであったフランス語がある程度にせよできて当然と考えられた。そしてルスティケッロは、主にマルコの話を書き取り、と同時に彼のメモやノートから取ったものも合わせてFを書き上げた、と推定された。

したがって、ルスティケッロの役割は口述筆記が主、編集が従ということになる。マルコもフランス語を用いたのなら、フランス語への翻訳は余り重

要性を持たない。もっとも、すでにフランス語で書かれていたのなら、何故さらにあのような奇妙なフランス語に訳す必要があったのか疑問ではあったが。

もう一つの問題、RにのみあってFにみられぬ記事については、Fが原本である以上、解放後ヴェネツィアでマルコ自身によって追加されたか、あるいは後の写字生や編訳者やラムージョ自身によって書き加えられか、いずれにせよジェノヴァで作成されたFの段階にはなかったものと考えられた。

そうした議論がしかし、根拠を欠く憶測や周囲の状況や事例からする推定もしくは傍証にすぎないことを批判し、各写本の批判的な対校に基づくテキスト研究の必要なことを唱え、自らそれを行って従来 of 定説を覆したのがベネデットであった。彼は、他のフランス語版・トスカナ語版・ヴェネト語版・ラテン語版が全てFもしくはその兄弟写本から派生するコピーであるのに対して、RとZが同じくフランク-イタリア語写本だがFよりはっきりと優れた先次の写本に由来していることを検証した。そのことは、Fはオリジナルではなく、それに先立つ段階のあることを意味した。したがってまた、RとZにのみ含まれる記事は、後に書き足されたものではなく、その最初の段階からすでに含まれていたと見られることになった。しかもその祖本は、マルコの口述を筆記したのも、メモやノートからルスティケッコが独自に編んだものでもなく、マルコによっておそらくフランス語で書かれていたであろうかなり完成度の高い草稿とでも呼ばれるべきものから、ルスティケッコによってFのごときフランス語で記述されたと考えられた。

とすると、ルスティケッコの役割はもっぱら編者となる。ルスティケッコに関する限り、ベネデットにあってはその評価は従来 of 説においてより低くなったと言わざるを得ない。

その後は、Fに先立つオリジナルの存在、マルコの草稿とルスティケッコによる記述というこのベネデット説を基本として、そのオリジナルの成立過程と、そしてマルコの草稿とルスティケッコの記述の隔たりをめぐって議論が展開されることとなった。

ガッロやボルランディは、最初に完全な草稿があつてジェノヴァの原本にはそれが全て含まれていたとするベネデットに対して、ヴェネト語で書かれていたであろうマルコの元の草稿そのものをオリジナル（第一次ヴェネツィア版）と位置づけ、Fはルスティケッコによるそのフランス語訳（ジェノヴァ版）であり、解放後ヴェネツィアに戻ったマルコによって追加・訂正された原稿（第二次ヴェネツィア版）からラテン語に訳されたのがPやZであり、その兄弟写本を用いて作られたイタリア語訳がRである、と考えた。またジェノヴァでは、ルスティケッコは単にマルコの草稿をフランス語でまとめたのではなく、ヴェネト語や片言のフランス語で語るマルコの口述を書き取ったり、トスカナ語やフランス語で尋ねたり、その草稿を訳したりする作業も同時に行った、とみた。

とすると、ルスティケッロは筆記者兼翻訳者兼編者となるが、その役割はFに限定された。しかし第二次ヴェネツィア版とそれからの派生物にも、このジェノヴァ版つまりFも何らかの形で利用された可能性は当然予想される。Zに、ルスティケッロのものに違いない序文と部分的にせよ序章十九章の一部が見られることと、後半がFとよく一致することがそれを証明している。序章の残りや前半のその箇所では、Zの訳者または写字生は省略するとはっきりと断っていた。

以上からすると、始めから全て揃った完全に近い草稿がありルスティケッロはそれをフランク-イタリア語でまとめただけである、とするベネデットの論にはやはり無理があろう。1295年の帰国時以降の出来事、あるいは1298年の時点では知り得ない記事が書かれてあることはすでに指摘される所であるが<sup>94</sup>、それとは別に内容によっていくつかの部分に分けて検討する必要がある。

まず序章であるが、父と叔父の第一次東行からコカチン姫を送っての帰国に至るまでの旅のいきさつを述べて、旅行記全体のまとめとなっているこの最初の十九章にしてまで、マルコが草稿を作っていたとは考え難い。この部分こそまさに二人の共同作業によって、つまりマルコが語り、ルスティケッロが尋ね、ヴェネト語とトスカナ語と片言にせよフランス語も用いられて、またマルコが旅行中に控えていたメモやノートを見、さらにはおそらくその場でマルコが用意した原稿も見ながら、ルスティケッロが書き上げることによって出来上がったものであると思われるからである。文体や表現もそのことをはっきりと示している。

次に、本文は商業的記録的な部分と物語的歴史的な部分とに分かれるが、完成された草稿があり、ルスティケッロが書き換えるだけで済んだ部分があったとすれば、それはガッロが分析したごとく前者だけではなからうか。この部分が、マルコの前稿を基にルスティケッロがそれをほぼ忠実にフランス語に置き換える形で出来上がったであろうことには、誰も反対はしない。しかし読み比べてみれば一見して分かるが、ペゴロッチェの書がその名のとおり全くの商業案内であるのに対して、マルコの書はそれよりは旅行記、各地の地理・歴史案内の性格が強いし、商売とは関係ない伝説や逸話もちりばめられている。東方交易マニュアルとしての詳しさと専門性は比較にならず、マルコの書が現実に東方交易に従事する者に役に立ったか、あるいは立つか極めて疑わしい。その違いは、ルスティケッロに帰せられるべきではなからうか。もしマルコの書が、ペゴロッチェのそれより東方に関して詳しいだけの同じように無味乾燥なものであれば、後の成功は見なかったことであろう。

問題は後者である。多くのお話しや歴史を含むことが知られるその物語的な部分まで、商人であったマルコが周到な草稿を用意していたとは考えにくい。獄中その場で書き下ろしたことも考えられるが、それは二人が別々の房

にあつて話しが出来なかつた場合である。出會つて共同作業が出来た限り、この部分も二人の対話を通じて進行して行つたと考えるのが自然ではないだろうか。それにここには、多くの人の指摘するごとく、ルスティケッロ自身の知識や想像も込められていることは間違いない。さらには、マルコとルスティケッロのどちらの所有に帰すにせよ、第三者の手になる典拠のあつたことも考えられよう。

もう一つの大きな部分をなす、フビライの宮廷や元朝の社会に関する該博な記事も、単にマルコの草稿によつたとするには余りにも詳細ではなからうか。グラン・カンの役人であつたとのマルコの言葉を信用すれば、直接目にし耳にする機会があつたであろうが、それらの記事を、自分の記憶やノートや日誌やあるいは大カーンへの報告書の下書きだけで書けたであろうか。ここにはむしろ、父や叔父のノート以外にもその他の様々な資料の存在を想定すべきではなからうか。その正確さ詳細さがかえつて、それがはたして一人の旅人か一介の商人か一下つ端役人か色目人の使節であつたマルコにして書き得たものかどうか、別の者の手になるのではないかとの疑惑の有力な根拠となっているのであるから。<sup>95</sup>

上にたどつた諸説にも分かつるとおり、奇妙なことに、西方の論者たちはメモであれノートであれ草稿であれ全てマルコによつて、あるいはせいぜい父と叔父によつて作成されたものしか想定せず、それ以外の資料については一切言及することなく、それらが存在したことも利用されたことも考えようもしないが、二十六年の東方旅行、十七年の元朝治下中国滞在の間に集められた、あるいは書き留められたいろいろな言語で書かれた様々な形態の資料、とりわけペルシャ語のものが用いられたことが予想される。もちろんそのままルスティケッロによつて利用されたわけではなく、それらを基にマルコが説明し、また原稿を書くという形でなら可能なはずである。それともこれらが、最近主張されるごとく、マルコではなく同時代のあるいは後世の全く別の者の手になつたものか、筆者には今のところ判断が付きかねる。これらは今後、イスラム文献の研究によつて明らかにされてゆくことであろう。<sup>96</sup>

最後に、ZやRにのみあつてFにない記事は、0<sup>1</sup>からFに至る過程で抜け落ちていったとするのも不自然である。

第一に、その期間が短すぎる。パリ国立図書館の写本1116そのものは十四世紀最初の数十年のものとのことであるが、その祖本0<sup>1</sup>が作られたのが1298年であることは動かせない。F系写本で年代の分かっているもののうち、最も早いのは前述グレゴワール稿本の1307年、次はトスカナ語「オッティモ」の1309年以前、ピピーノのラテン語訳は1314-20年と見られる。しかもそれらは全て0<sup>1</sup>ではなくFの兄弟写本から派生したものであるから、Fはそれらよりさらに遡る。つまりわずか数年のうちに早くも、次に述べるごとく大量のしかも興味深い記事が省かれたことになる。そのことは、Fとその兄弟から派生した諸写本FG・TA・VAさらにはPなどとの異なりが、せいぜい語句や

短い文に留まることからしても不自然である。しかも、それらからさらに第三次・第四次写本への移行期間はより長いにもかかわらず、その異なりはそれほど大きいものではないことからしてもそうである。

第二に、その量が多すぎる。実に二百箇所以上に及ぶ。しかも部分的に語句や文が省略・短縮されているのではなく、章や記事がごっそりとまとまって欠けている<sup>97</sup>。これは写字生によって省略されたのではなく、たとえマルコの草稿や資料にはあったとしても、少なくともルスティケッロの原稿には最初からなかったと見るべきであろう。

第三に、その中でもアフマド事件(§96)、グラン・カンの側室選び(§91)、フビライの宗教観(§89)、キンサイ(杭州 §167)等々、物語として興味深いものが欠けている。もし最初の草稿にあったのなら、そうした記事が物語作家ルスティケッロや後の写字生によって削除されることは考え難い。

第四に、Fはそれなりに全体としてまとまった形を示しており、Zのように明らかな省略の跡をとどめていない。一方、とりわけRは明らかな挿入の跡をとどめている。

これらの記事がF他のテキストに欠ける理由をベネデットは、期待に反して言語学的・文献学的にではなく、心理的・社会的に説明する。すなわち、余りにも空想的で荒唐無稽と思われたからか、宗教的配慮から省かれたのであると<sup>98</sup>。しかしその説明はとても納得し難い。まず、他にもさらに空想的で荒唐無稽な記事は数多いし、宗教的に差し障りのある記事もこれまた数多い。それに宗教は、聖職者・知識人・庶民を問わず当時の人々皆にとって最も関心深い事の一つだったはずである。一方では、上に挙げたようなフビライの朝廷や中国の社会についての真面目で有益な記事が欠落している。もっとも、余りにも詳しすぎたがため省略した、あるいは理解できなかったがため採らなかったことは考えられるが。

これらの困難は、それら新記事がジェノヴァではなく解放後のヴェネツィアで、マルコが持って行ったか取り寄せたかはともかくジェノヴァではルスティケッロによって採用されないままになったメモや資料、それに父や叔父のノートその他故郷に残してあった資料、さらにはその後の情報をもとに、すでに出来ていたFに書き加えられた<sup>99</sup>、と考えることによって全て解決され得る。FにあってZ・Rにないのはもちろん、Zの訳者か写字生や、ラムージョが底本として用いたその他の写本の写字生によって省略されたか、ラムージョによって採られなかったためである。

こう考える時唯一障害となるのは、共通する部分ではZはFと極めてよく一致しそのラテン語訳と考えられてよいほどであることから、ZもまたFと同じようなフランク-イタリア語写本から由来するとされる点である。では、Fに欠ける部分の文体も共通する部分の文体と全く変わらないのかそれとも異なるのか、筆者には判断する能力を欠く。しかし、同様な協力者を得ることができたと考えるのは必ずしも無理ではあるまい。ルスティケッロがここ

でも協力したと考えるのが最も手っとり早い、その根拠はないしその可能性も薄い。そうした協力者がいたのでなければ、マルコ自身によってと考えることもできるが、となると彼のノートもそうした言葉で認めてあったこと、ジェノヴァでのルスティケッロとの対話にもそれが使われたことの可能性が強まってくる（これらの問題については、次回に稿を改めて記す）。

## 2 騎士物語の謎

ルスティケッロは騎士物語作家であった。事実その作品は今にも残る。その文体が旅行記のそれと全く同じものであることは、ベネデットによって実証された。また旅行記の中でも、騎士物語作家としての影響は大であると言われる。が、今もアーサー王ものの人気は高いが、彼の作品が読まれることも取り上げられることもない。では、ルスティケッロの騎士物語とはどのようなものなのか、その長大でカオス的といわれる作品を、ルーゼスによる要約とタッシのイタリア語訳によりつつごく掻い摘んでたどってみる。<sup>100</sup>

最初に次のような見出しがある (ms. 340) :

「コーンウォールのマーク王の甥にして善き騎士トリスタンの父たりしレオンワのメリアドゥス王の書、ここに始まる。最初にブラノール・ル・ブリュについて。彼は百二十才であった。いかにアーサー王の宮廷にやってきたか、一人の貴婦人を伴い来たったか、いかに槍の一突きでもって十二人の王と円卓の騎士をことごとく倒したか。彼らは彼を鞍から落とすことはできなかった。次いで、恐れを知らぬ善き騎士ギーロン・ル・クルトワ、巨人アリオアム・ド・ソワソーニュ他その時代にいた善き騎士たち、その時代に彼らがグラン・ブルターニュとプティト・ブルターニュで遭遇し行なった冒険の数々について語る」

次に、最初に引用した著名な「プロローグ」がくる。そして物語が始まるのだが、見出しにあるとおりに最初は老騎士「褐色のブラノール」の話である。

ペンテコステの日、キャメロットのアーサー王の所に円卓の仲間たち、カラドック王、アイルランドのヨン王、ノルガレスの王、フラン人の王その他十数人の王と、ランスロ、トリスタン、ガウェイン、パラメード、ラモラらの騎士が集っていた。そこへ一人の巨人騎士が美しい乙女を連れてやって来、槍試合を申し込む。勝った者がその乙女をものにすることができる。まずパラメードが立ち上がったが、かの騎士は剣も取らずに倒す。ラモラ他の騎士も全て敗れ、次に出たトリスタンも左肩に傷を負う。最後に立ち向かったランスロも倒される。さらに、妃グィネーヴルが引き留めるにもかかわらず立ち上がったアーサー王も、そして他の王たちも皆敗北した。ようやく彼は、自分は「そなたの父ウーテルペンドラゴンの大の親友」だったこと、齢百二十で、ここ四十年武器を手にしたことのないこと、アーサー王の騎士たちの名声を聞きつけて試しにやって来たことなどを語る。また付け加えて言うに、

今のいかなる騎士も、昔の二人の最高の騎士エクトル・ル・ブリュとその息子ガレオート・ル・ブリュには敵わないであろうと。そしてこの老騎士は、王の招待を受けられないことを謝りつつ、乙女を連れて去って行った。結局王もトリスタンたちも、彼が誰であるかは分からないままになる。最後に、「この話を語ったのは、ルスティシャン師が初めてそれをイギリス王の書に見出したからである。それを自分の書の最初に置いたのは、それがかつてこの世の物語の中で書かれた最も美しく驚くべき冒険だからである」と、再びプロローグのことが繰り返される。

老騎士の話はまだ続く。ある日アーサー王の宮廷に、隣国の伯から攻撃されているラモラ・ド・リストノワ卿の姪が、救いを求めてやって来る。ラモラは、アーサー王の父ウーテルペンドラゴンより前に跡継ぎのないまま死亡していた。そこで宮廷にいた、ラモラの友人だったと名乗る老騎士が救援に行く。乙女の母は、たくましい若者ではなく老人の来たことにがっかりするが、彼は隣国の伯と戦って勝利し、娘と結婚する。さらに、サドクという森の中で、カラカドスという騎士に誘拐された娘を救い出す。この娘はセギュラデ・ル・ブリュの妹で、老騎士の姪に当たることが分かる。そこで彼は、自分がブラノール・ル・ブリュで、叔父であることを打ち明ける。アーサー王の宮廷に戻ってきた老騎士は、そこでも自分がウーテルペンドラゴン王の宮廷騎士であり、エクトルの従兄弟ブラノール・ル・ブリュであると告げる。ブラノールがその頃最高の騎士であったことは知られていたが、もうとっくに死んだと思っていた宮廷には、大きな驚きが広がった。

ここで、「リュスティシャン師は、この老騎士については他の師たちの語るに任せ、ランスロやトリスタンの素晴らしき冒険」に移る、とある。まず、レオンノワのメリアドゥス王の息トリスタン卿についてである。彼がログレス国にやってきたのは、白い手のイズーを奪ったと同じ年のことであった。トリスタンがある夜泉の側で眠っていると、異教徒の騎士パラメードがイズーに対する恋の嘆きをもらしているのを耳にする。明け方二人は闘い始めるが、仲裁が入って、別の所で改めて決闘することになる。トリスタンはそこに出向いたが、パラメードは重病に陥って来なかった。そこへランスロが通りかかり、トリスタンは彼をパラメードと思って闘いとなるが決着が着かず、二人は互いに名乗り合い、人違いだったことが分かる。ランスロは彼をアーサー王の宮廷に伴い、王はガウエインらと共に出迎えて歓迎する。かくてトリスタンは円卓の騎士の仲間となった。

しばらく滞在した後、トリスタンはその宮廷を辞し、冒険に旅立つ。ランスロが同行を申し出るが、トリスタンは断る。「危険の森」を進んでいると、妖姫モルガンの三十六人の騎士と出会い、彼らと戦って、ディナダンとドディネルの二人を解放する。ところが彼らの城に滞在しているとき、正体がばれてトリスタンは捕らえられる。そこへパラメードがやってきて、彼を救い出す。

次に「師は、かの書にはなかったガラハッドについて語る」。まず若きダリデがガラハッドに戦いを挑むが、敗れて殺される。ある日パラメードとトリスタンがガラハッドと遭遇し、戦いとなるが、トリスタンがバンの血統の者だと分かって戦いをやめ、三人は同宿する。この後、トリスタンはバニン、ブリオベリス、ラモラら多くの騎士と決闘した後、リオネル国に行き、四カ月後ログレスに戻ってきて、ランスロと最終的に仲直りした。その後、パースヴァルの数々の冒険に移る。

ある時、ガレオート・ル・ブリュからアーサー王に対する戦さが持ち上がる。ここで、二人の恋を取り持ったとされるガレオートにちなんで、「王妃グニューヴルとランスロとの間には確かにいくつかのことがあったが、それについては師は、二人の名誉を重んじて今は何も語らない。・・それをまた別な風に語っている他の書もちろんあるが」との、興味深い一文が添えられている。

次に「師は、ガレオート・ル・ブリュとギーロン・ル・クルトワ・デュ・ボワの冒険を語り始める」とあり、この廷臣ギーロンと、バン、ラモラ、メリアドゥス、それにランスロやトリスタンをも含めた数多の騎士との戦いが語られる。そして最後に、「アーサー王と遍歴の騎士の物語終わる」とある。ここまでの前編と考えられる。

別の写本(ms. 355)では三行の空白の後、「トリスタンの父たりしメリアドゥス王とギーロン・ル・クルトワとパラメードの書ここに始まる」と見出しがあり、これが続編と考えられ、その最初には始めに紹介したエリー・ド・ボロンの口上書きがついている。

物語は次のように始まる。「大いなる勇気と力と献身を備え、楽しみと気晴らしに満ちたのがアーサー王であった。彼は Kristus が十字架に架けられて三年後〔別の写本では400年後〕に王座に上った。父のウーテルペンドラゴンは、インドに至るまでの全世界と同じく、ログレス王国が行っていたローマ皇帝への貢納を止めさせた」。そうした貢納の一部としてローマ皇帝の人質となっていたバビロンの異教徒の貴族エスクラボールが紹介される。彼は、皇帝の許しを得て息子パラメードを連れてやがてログレス国にやっ来て、ペリノア王の命を救い、最後にカメロットに来て、アーサー王宮廷の一員となる。そして話は、子のパラメードへと移る。

異教徒の騎士パラメードは、やがてイゾルデに対する激しい恋にとらわれる。が、求愛しているところをトリスタンに見つけられ、一騎討ちとなるが、あえなく敗れる。それでも彼は悪だぐみによってイゾルデをさらうが、今度もトリスタンに奪われる。最後にトリスタンと戦ったさい、剣を手からたたき落とされ、それがきっかけで彼はキリスト教に改宗した。

以上はサラセン騎士パラメードを主とする粗筋だが、その間にここでもトリスタンやランスロら当代の著名な騎士たちの昔に活躍していた者たち、つまりアーサー王の父ウーテルペンドラゴンの時代のメリアドゥス、ギーロン、

エクトル、ガレオットたちによる多数の騎士との戦いと冒険の数々が語られ、そして唐突にトリスタンの死で終わる。そして最後は、これまた第一章で紹介した「エピローグ」で終わる。

以上のごときごく大ざっぱな粗筋からも窺えるごとく、ルスティケッロの騎士物語は、当時出回っていた多くのアーサー王もの、とりわけ「散文トリスタン」「湖のランスロ」「聖杯の探求」「パラメデス」等々を、要約したり断片をつなぎ合わせたり、自分の創作も付け加えたりして編んだものようである。しかし、作者が最初に強調していたように、当時すでに多くの作者が書いているトリスタンやランスロのことではなく、メリアドゥス王のような昔の騎士たちのことを書いたのは、自分が手にした書にそれを「初めて見出した」からであったとすれば、それら彼の種本の中にはそうしたものがあり、彼の言うごとく、イギリスかフランスの宮廷に蔵されていて、エドワードと何らかの関係があったことも考えられるかもしれない。

ただ、前にも記したごとく、これら作品のどこまでがはっきりとルスティケッロのものか、確定しない。ルーゼスによれば、おそらく「メリアドゥス」とか「ギーロン・ル・クルトワ」と題される前編全体と続編の最後の部分だけであり、「パラメード」と題される続編は大部分、おそらくエリー・ド・ボロンやその他の原作から取ってきた断片をつなぎ合わせて後世の写生か編者が挿入したもの、である。<sup>101</sup>

### 3 人物の謎

ルスティケッロの人物像については相変わらず謎のままであるが、以前からエドワードとの関係で興味深い事実が推測されている。ポーロ家の三人もこのイギリスの皇子とアークレで出会った可能性が高い、というのである。

前述のごとく、エドワードは1271年5月始めにシチーリアのトラパニから出航し、キプロスに寄って5月9日にアークレに着き、翌1272年9月24日までシリアに滞在している。この時期は、ちょうどマルコらが同地にあった時と重なる。

三人が最終的にアークレを発って東方に向かうのは、グレゴリウス十世が選出されて、就任のためイタリアに向かう間だから、1271年9月1日から11月18日の間となる。一方そこに来た時期は明確でないが、父と叔父が第一回東行からアークレに着いたのは「1269年4月」、そこからヴェネツィアに帰り、「二年間」そこに留まった後、マルコを伴って再びアークレにやって来た、と言っている。この二年を満で数えると、1271年4月頃ヴェネツィアを発ってそこに来たことになる。通年で数えると1269年と70年だから、1270年のいつかの時点、しかしさほど長くアークレに滞在する理由がなければ、その年の末頃ヴェネツィアを発ってアークレに向かったことになる<sup>102</sup>。いず

れにしても、エドワードがそこに着いた1271年5月には彼らはすでにアークレに来ていたであろうと予想される。

一方、後のグレゴリウス十世つまりテバルド・デ・ヴィスコンティ・デイ・ピアチェンツァがいつアークレに着いたかは詳らかでない。ニコロとマッテオは、最初の東方形から帰ってきたときつまり1269年4月すでに教皇特使として赴任していたテバルドと出会ったと書いているが、これはありえないと考えられている。ムールやクリッチリーによれば、当時テバルドはオットボーニ・フィエスキ（後のハドリアヌス五世）に同行して十字軍勧説のためヨーロッパを巡回しており、1269年4月にはイギリス、同12月28日にはパリにいたことが確認されているからである。彼はその後さらにしばらく南イタリアに滞在しており、アークレに来たのは最も早くて1270年のいつか、5月のエドワードに同行してきた可能性もあるらしい<sup>103</sup>。いつ落ち合ったにせよ、アークレでは後のグレゴリウス十世とエドワードは、十字軍や対マムルーク遠征について、さらにはイル・カン国のモンゴル人との提携について等々様々な問題を協議したことは間違いない。<sup>104</sup>

ポーロたちとそのテバルドとの関係はすでに明らかである。この教皇特使の紹介を得て彼らは、エルサレムの墓に燃えるランプの油をもらったり、グラン・カン宛の書簡と高価な贈り物を託されたり、二人の修道僧をつけてもらったりした。とするとつまり、テバルドを介してエドワードとポーロたちがそこで知り合った可能性は大いにある。とするとまた、必ずしも文言どおりには受け取られていない、ポーロ一行がもったという政治的・宗教的使命というのが現実味を帯びてくる。<sup>105</sup>

しかも、可能性はそこに留まらない。前に述べたごとく、もしルスティケッロがエドワードに同行してシリアにやってきたのなら、あるいはユールが想像したごとく、アークレでエドワードと知り合ってその本を借りたのなら、ルスティケッロがマルコたちとも知り合った可能性もないわけではない、ということになる<sup>106</sup>。

もっともこの可能性は、それにまつわる他の状況や条件からすると否定的である。クリッチリーによれば、まずルスティケッロに当時のシリアの状況に通じている様子は窺えない。前述の、父と叔父が第一回東方形から帰ってきたときテバルドがすでにアークレで教皇特使としていた、との誤りに気づいていない<sup>107</sup>。またエドワードは、シリア滞在中暗殺者教団の刺客に襲われて毒を塗った刀で切りつけられたがその刺客を切り殺した武勇伝(1271年7月)で知られるが<sup>108</sup>、ルスティケッロはそのことに一言も触れていない。

それに何よりも、もしルスティケッロがこの時マルコと識り合っていたのなら、ジェノヴァの獄での再会を奇遇として必ずや一言書き加えたであろうと想像した方が自然であるが、そうした関係を匂わす言葉は一切ない。最初の偶然の出会いという印象が圧倒的に強い。

しかし一方では、エドワードは1272年1月にシチーリアを発った後、王位

に就任したにも係わらずイギリスには直行せず、前述の負傷のこともあって実にゆったりとした足取りで、南イタリア・ローマ・ヴィテルボ・フィレンツェと陸路イタリアを北上してフランスに向かっており、その間のどこかでルスティケッコが彼の知己を得た可能性は排せない。

十三世紀は都市国家ピーサが最も発展していた時期だった。その商圏は海路はプロヴァンス・スペインからアフリカ・シリア、さらにはコンスタンティノーブルと黒海までの地中海全域、陸路はフランチージェナ街道（後のカッシア）を通じてフランスにまで及んでいた。政治的には、イタリア随一の「帝国都市」として伝統的にドイツの神聖ローマ帝国とのつながりが深く、そのローマ教会との対立の中で重要な役割を果たしていたし、国内的にはギベリーニの牙城であった<sup>109</sup>。文化的にもトスカナ随一の先進地で（フィレンツェの発展は翌十四世紀）、こちらはフランスとの結びつきが強く、その影響を受けてとりわけ貴族・教養人の間ではフランス語が好んで使われたし、騎士文学もいち早く伝えられ、大流行した。（ベルナボ・ヴィスコンティ(1354-85)の息子の一人は、ランチェロット・パラメードと名付けられていた。）

事実ピーサは、東のヴェネツィアとならんでイタリアにおける騎士物語、とりわけイタリア人に最も好まれたトリスタンもの作成の中心だった。そしてそれらとルスティケッコの作品との密接なつながりが指摘されている。今に伝わるイタリア語散文トリスタン物語では最も古い十三世紀末のリッカルディアノー版 *Tristano Riccardiano* は、ピーサを中心とする南トスカナ語で書かれているし、その中には部分的にルスティケッコの作品から取り込まれたと見られる箇所がある。やはりトスカナ語で書かれている十四世紀前半の『円卓物語』 *Tavola Ritonda* も、ピーサとのつながりが深い。作者は不詳だが、文中典拠として「ガッド・デ・ランフランキ *Gaddo de Lanfranchi* 殿の書」というのが何度も言及されており、しかもその書は以前「サヴォイア伯ピエーロ *Piero* 殿」のものであったと記されている。このピエーロは1268年に死亡しているが、イギリス王室と密接な関係があり、エドワードの父ヘンリー三世と知り合いだったことが知られている。ガッドについては正確なことは分からないが、その「ランフランキ」の名からしてピーサの貴族であることは間違いなく、古記録では *Pellai Lanfranchi* 家に *Gaddo* の名が見え、彼は1288年『神曲』に名高いウゴリーノ伯を追放した大司教ルッジェーリー派の中にその名を連ね、1306年に死亡していることが確かめられている。<sup>110</sup>

さらにはまた、これら二つの並んで最も古い散文トリスタンとして知られる十四世紀始めのヴェネト版 *Tristano Veneto* にもルスティケッコの作品が取り入れられている。前半第392章まではフランス語散文 *Roman de Tristan* の訳であるが、後半第393-558章はルスティケッコ *Meliadus* のヴェネト語訳である。ただし、話の順序は大きく組み替えられており、例の「皇帝陛下・・・」に始まるプロローグは第523章に置かれ、第536章で再び、これは

「Rusticho師」がイギリス王の書から取ったものであることが繰り返されている。<sup>111</sup>

そのイギリス王エドワードが逗留したシチーリア宮廷の君主シャルル・ダンジューとも、ピーサは大きな関係がある。1266年ベネヴェントの戦いにフェデリーコ二世の庶子マンフレディを、翌々年タリアコッツォの戦いに神聖ローマ皇帝コンラート四世（コッラディン）を敗って南イタリアを征服したシャルルは、すぐトスカナにも手を延ばしてグエルフ都市フィレンツェを実質的に支配下に置き、次いでギベッリーニ都市ピーサを攻めたがこれは失敗した。しかしシャルルは、前述兄のルイ九世主導になる十字軍にピーサの海運力を必要としたことから1270年和平を結び、ピーサも艦隊を提供して協力した。そのシチーリア宮廷を当時文化の一大中心としたかつての主フェデリーコ二世は、最初の近代的君主といわれるほど開明的な君主で、多様な学芸に通じていたことでも知られるが、「*Palamides*を記した五十四帖の書」を贈ってくれたことを一廷臣に感謝する手紙が残っており、それはイタリアでは同書に言及した最初の記録とのことである。それこそがルスティケッコが用いたという問題の「エドワードの書」ではないか、と推測するのは楽しい空想である。<sup>112</sup>

このように、ルスティケッコやマルコ、エドワードやグレゴリウス十世、それに当時の出来事や場所を結び付ける糸は意外と多い<sup>113</sup>。たとえ直接でなくともルスティケッコがイギリス王室と何らかのつながりを持ち、あるいは誰かを介してそこに属する書物を手にできた可能性も、必ずしも証拠のないことをもって頭から否定することはできないかも知れない。

もっとも、ルスティケッコについてはもはやピーサの古文書庫に新たにめくるべき一葉の羊皮紙とて残っていないのであれば、他の都市に求められるべきなのかもしれない。その一つの可能性として、管財人としてマッテオを指名しているポーロ家の親戚とみられるヴェネツィア女性エレナ・ボルドゥの遺言書(1302年)にRustegelloなる名の方が見えることが報告されているが、この名前はヴェネツィアでは珍しいとのことである<sup>114</sup>。またクリッチリーは、1330-40年代にシチーリアのパレルモで公証人をしていたRustico de Piseなる人物のいたことを紹介している<sup>115</sup>。これらについてもそれ以上の情報はなく、余りにも孤立しているとの感は否めない。あるいは、解放後間もなく亡くなったのか。

二十世紀イタリアの物語作家ダヌンツィオは、十四世紀末頃のキプロスを舞台としたフランス語の戯曲『ラ・ピサネッラ』*La Pisanelle* (1913年)で、ルスティケッコの名とその書を登場させてこの先輩作家を記念した<sup>116</sup>。主人公のピーサ女性の名は、カタリーナ・ルスティケッリCatalina Rustichelli:

ねえ、カタリーナ・ディ・ピーサ、  
キンツィカの橋のたもとに住んでいた、  
カタリーナ・ディ・シモン・ルスティケツリ、  
私のこと覚えてて？

・・・

ねえ、カタリーナ、  
私たち、一緒に食べたわ、  
菓子屋のゲルフィーノ・ディ・リクッキのところ、  
リソルにフランにウエハース、  
あのタルタル人の女奴隷のいたとこよ、  
歯が四本欠けたからって、  
僧院長から転売された。<sup>117</sup>

キプロスの都ファマグスタの港に積み上げられた東方交易の略奪船の積み荷の中には、数々のオリエントの珍品に混じってルスティケツロの本が発見される：

物語、物語！

『メリアドゥス王の物語』だわ。

・・・

金文字で彩られ、  
装丁は深紅のビロード、おお神よ、  
二欄組み  
この綺麗な絹・・・  
この鋳、この留め金！<sup>118</sup>

#### 4 おわりに

あのような書物、ましてや十三世紀という時代にあって、空間的にユーラシア大陸のほぼ全体を覆い、時間的に前後三十年の歳月をかけ、内容的にも商業記録と地理案内、旅行記と物語、元朝の歴史と社会と多岐にわたる書が、一人の人間によって一つ所で一つ時に、一様な形で成ったとはとても考えられない。多くの人間によって、多くの機会に、多様な形で成立したと考えるべきではなかろうか。遥かなる東方への旅、中国での活躍、ジェノヴァとの戦いと捕囚、ルスティケツロとの出会いと筆録、そして解放と帰還と、余りにも「物語」としての舞台と条件が揃いすぎているため、あらゆることがマルコ一人に集中されてしまいがちだが、複数の段階とそれに関わった複数の人間に分けて考えるべきであろう。

まず旅行中においてであるが、マルコがジェノヴァの獄に持って行ったあ

るいは取り寄せたというメモやノートあるいは草稿は、彼のよりも父ニコロや叔父マッテオによって書かれたもの、さらにはそれ以前から先祖代々伝えられてきたものの方が多かったのではあるまいか。彼らは商の先輩でしかもすでに十年にわたる一回目の東方行を経験していたのであり、ましてやマルコは旅に出たのは十七歳の時で、帰国したときですらまだ四十一歳の若輩だったのだから。さらにまたその中には、旅の途次や中国やペルシャ滞在中に集めたであろう様々な言語で書かれた色々な資料も含まれていたに違いない。

次にジェノヴァにおいては、それら書かれたものとマルコの話の山の中から、彼の助けを借りながらも、あのような形にまとめて実際にペンで書き記したのはルスティケッロだったはずである。そこには彼自身の知識と想像と言葉が投入されているに違いない。しかも、クリッチリーの言うごとく、協力したのは彼一人だけではなかったかも知れない。ラムージオは、さるジェノヴァ貴族の協力があったという。それがルスティケッロのことを取り違えたものか、それとも旅の途中ででも知り合ったジェノヴァ人がいたのか分らないが、ジェノヴァでマルコが本を書く自由を許されたのなら、その間ずっとルスティケッロ以外とは出会わなかったとは考えにくい。これまたラムージオの言うほど大げさでないにしても、多くの者たちがその話を聞きに来るということがあり、その中には協力を申し出る者もあったのではなかろうか<sup>119</sup>。ジェノヴァのことについてはマルコは一切語らないが、彼が捕虜になった経緯がその雄弁な証拠であるように、当時両市は東方交易をめぐる激しい争いを繰り広げており、それに通じた恰好の人物であるマルコから有力な情報を得ようと、ジェノヴァ当局が尋問したり、手記を書くよう求めたり、ルスティケッロを筆記者として紹介し、出来上がると検閲したといったことも十分に考えられよう<sup>120</sup>。ジェノヴァでのことも、大きな謎の一つである。

さらに解放後のヴェネツィアにおいても、再び父と叔父の手あるいはヴェネツィアに残っていたノートが加わったことは確実であろう（ニコロの死は1300年頃、マッテオは1310年。ラムージオによれば（序文2）、死に臨んでマッテオは書が全てにおいて真実であることを誓った。）

故郷に帰ったマルコからティボーが手ずから写本をもらったこと（1707年）、ピピーノがラテン語に訳したこと（13014-20年）などはすでに見たが、それより早く1303年にはパドヴァの自然学者ピエトロ・ダーバノが訪ねてきて話を聞き、南半球についての報告を発表している<sup>121</sup>。他にも一躍有名となったマルコから東方のことを知ろうとしたり、あるいは逆に別の情報を提供しようとした者も多かったに違いない。マルコ自身もヴェネツィアに戻った時まだ四十五歳、そのまま引退したとは考えにくい。何か大規模に活動した形跡はないが、今や一大権威となった東方について無関心では有り得なかったことであろう。自分からも積極的に情報や知識を求め、それらも基にして追加や補足・訂正を行なったとしても不思議ではあるまい。<sup>122</sup>

そして最後に、今まで一切取り上げてこなかったが、ピピーノのような翻

訳者、ラムージョのごとき編纂者、そして数多くの無名の写字生の存在がある。彼らの介入は明らかで、写本の数の多さと相互の異なりがその雄弁な証左である。

このように、多くの人たちの手によって、複数の段階に分かれて、様々な形でかの書は出来上がったと考えた方が納得しやすい。

したがってその書は、その旅に基づいた作品ではあっても、マルコ・ポーロが書いた本ではない。ベネデットがマルコを「唯一の真の著者」と呼ぶとき、それは別の意味、つまり東方を旅した本人はマルコであり、その観察や考えや感情は彼のもの以外ではありえないという意味と、今に伝わるテキストは全て縮小され改編された崩れた形のものであり、マルコの草稿のオリジナルを完全には伝えていないという警告であるが、表現や執筆はやはりそれとは区別されるべきであろう。

ベネデットやガッロ、ボルランディの言うごとく、彼がフビライに提出したという報告書の下書き、あるいはそれらを含む自筆稿が発見されたとき、それをマルコの作品と呼ぶことには誰も異存はないであろう（この場合もそれが父や叔父の手になるものである可能性はあるが）。しかしFに関する限り（厳密にはFの祖本<sup>01</sup>）、それはルスティケッロの作品と呼ばれてしかるべきであろう。彼がアーサー王物語の独創的な作者ではなくとも、それらを集め要約し翻案したものがルスティケッロの作品と呼ばれるのと同じ意味においてである。

なるほどルスティケッロは、騎士物語の独創的な作家ではなかった、それらを集めて書き直した者であった。しかし、イタリアではアーサー王物語は彼の版やそのイタリア語訳で広まったし、今は彼の版が使われることはないが、円卓の騎士たちの物語はなお広く読みつがれる。旅行記においても、なるほどルスティケッロは旅した本人ではなかった、これまたマルコの話や草稿からイタリア語がかったフランス語に書き直した者であった。が、その旅行記については言うまでもない、これまた今は彼の版がそのまま使われることはないが、全世界で広く読まれる。彼がアーサー王物語の最初の作者でなくとも、今に残る騎士物語が彼の作品と呼ばれるのと同じ意味で、マルコ・ポーロの書の最初のもものはルスティケッロの作品と呼ばれてしかるべきであろう。

アーサー王とグラン・カン・フビライ、ログレス国のカマロット城とカンバリック大都の宮殿、そこに集う円卓の騎士たちと十二人の重臣、彼らの数々の冒険と武勲、そして西方ブリテンと東方カタイ、王がなお生きて棲んでいるというさらにその西の彼方の楽土アヴァロン島と、屋根が黄金で葺かれてあるというさらにその東の彼方のジパング島、当時これらを二つながらに自らの手に掛けることのできた者は、ルスティケッロにおいて他にあるまい。

パオロとフランチェスカがルスティケッロの本で読んでいた可能性は、残念ながらほとんどないようである。ランスロとグィネヴィアの恋物語は、彼

の版には出てこない。

### 【註】

1. 初出：『大阪国際女子大学紀要24号-2』1998、pp.1-48。なお、拙訳マルコ・ポーロ／ルスティケッロ・ダ・ピーサ『世界の記』名古屋大学出版会 2013、pp. 701-35に、「解説A マルコ・ポーロ研究の歴史—ルスティケッロの発見とその役割」として、第1・2章が再録された。ここでは、そこで割愛された第3・4章と註を含めて全て掲載する。[ ]内は今回新たに書き加えたもの。]

2. Dante:Inf.V.127-38. 「ガレオット」とは、ランスロと王妃グィネーヴルの仲を取り持ったと伝えられる円卓の騎士の一人Galehaut。そのことから、この頃には「恋の取り持ち」の意味で用いられた。一般には、隣国の君主だったときブリテンに侵攻するが、後にアーサー王の宮廷に入り、ランスロの親友となった騎士。ルスティケッロの作品では、アーサーの養父エクトルの実子。

3. フランチェスカFrancescaは、ラヴェンナ君主グィード・ダ・ポレンタ・ダ・リミニGuido da Polenta da Rimini(il Vecchio) (在位1270-1310) の娘。1275年頃リミニの君主マラテスタ・ダ・ヴェッルッキオMalatesta da Verrucchioの息子ジャンチオットGianciotto (後に君主1295-1304) に嫁いだ。彼女の兄弟ランベルトLambertoの子が、亡命中のダンテが最後の数年をその宮廷で世話になったラヴェンナ君主グィード・ダ・ポレンタ (2世1316-22) 。その帰路に詩人がマラリアにかかってみまかることになるヴェネツィア行き(1321.8)も、この君主の使節として赴いたもの。

4. 『神曲』では、この地獄界第2圏にいる愛欲の罪の亡霊たちの中に、セミラミス・ディド・クレオパトラ・ヘレネ・アキレウス・パリスら名高い伝説上・歴史上の人物と並んで、最後にトリスタンも挙げられる(Inf.V.67)。第9圏の家族に対する裏切り者の中には、アーサー王の最期となる決闘の相手、王自身の不義の子とも甥とも言われるモルドレッドが挙げられる：「アーサー王の手によって、一撃のもと胸をも影をも刺し貫かれたる者」(Inf.XXXII.61-2)。ジネヴラ王妃についてもPar.XVI.14-5で言及されている。ダンテとアーサー王物語についての研究は数多いが、この問題が取り上げられているか詳かにしない(cf.Branca:13-23)。

5. 二人が殺されたのは1283、85、89年の諸説がある。

6. 古記録集は特に、Orlandini:23-68, Moule:523-95, Gallo:171-93.

7. 写本・刊本のリストは、Lazari:447-74, Yule:II.526-74, Benedetto:xi-ccxxi, Moule:509-19, Scognamiglio:143-7(刊本のみ), Watanabe:3-63(同)。

8. とりわけ1532年グリナエウスの*Novus Orbis*によって、さらに後に1671年のミュラー版によって広まった。彼らも原語は俗語(ヴェネト語)であろうと述べていた。ただしこれらは、1502年リスボンで出版されたポルトガル語版からのラテン語訳であり、内容的には大きくは違わないが、ピピーノのテキストどおりではないことが指摘される。(以下の引用にはMüller版を用いる。)

9. Ramusio:31-2, 拙訳<sup>1</sup>(1):75.

10. Müller:1, Iwamura:1-2, Lazari:439-40, 拙訳<sup>1</sup>(1):92-3. ムラトリーもピピー

ノ『年代記』の解説で、「1320年かそれより早く、俗語つまりヴェネツィア方言からラテン語に訳した」と記している(Muratori:583)。

11. Soc.Geo.:2. 後のベネデット版では次のように校訂されている: Rustacians→Rusticiaus, Jezu eut vesqui→Jesu crit nesqui (Benedetto:3-4).

12. Ramusio:75, 拙訳<sup>1</sup>(1):91-2 (この序文は、ラムージオが底本としたギジ家写本のものと思われる)。そのこと自体、興味深い問題を提示する。ベネデットによれば、ラムージオが用いた5種類の写本(Z.P.V.L.VB)のうちルスティッケロの名が挙げられているのはVのみだったから、とのことであるが、Zの作者あるいはラムージオによって意図的に削除されたことも考えられる(後述「ルスティッケロの謎」の章参照)。

13. Sessa:1, Pagan:A2, Imberti:5-6. 同版ではマルコ旅行記は、ニコロとマッテオがフビライのもとを辞するところ(第8章)から始まる(以下章区分はBenedetto<sup>1</sup>, Ricci, オキ<sup>2</sup>に用いられるものに従う)。

14. 「オットィモ」版は、第6章ニコロとマッテオのフビライ宮廷到着から始まる。

15. イタリア語名としてはRustichello (フランス語Rusticiaus, ラテン語Rusticellus)の正しいことがベネデットによって証明された: Benedetto:Non Rusticiano ma Rustichello, *Uomini e tempi*, Milano-Napoli Riccardo Riccardi 1953 pp.63-70.

16. Soc.Geo.:1. Benedetto版との主な異なり: bargions→borgiois, chi→qui, troveres→trovereres.

17. 後にクリッチリーは、こうした「皇帝・王・公・侯・伯・・」等と列挙する書き出しは全く類例がないわけではなく、13世紀にはいくつかあるとして、Rutebuef:*La complainte d'Outremer*, Martin da Canal:*Les estoires de Venise*, Dante(1320年の私信)らの例を挙げている(Critchley:3-4).

18. Paris:250-1, Löseth:423(fr.340より。若干の異なりがある), Benedetto:xix.

19. Benedetto:xv-vi(fr.1463より。[ ]内はCigniより)。Löseth:423-4(fr.340)には三つの写本(fr.1463, 340, 355)の異同が示されている。ø

20. 図1参照。

21. Benedetto:xvi-viii.

22. Benedetto:xviii(fr.340, 355), Löseth:472(同)。fr.1463には欠く。Benedettoは、このエピローグもエリーか後の編者のものと見る(p.xviii)。

23. I. D'Israeli:*Amenities of literature*, 1842, I p.103:「我らがヘンリー3世は、これらアングロ・ノルマン詩人たちの惜しめないパトロンであった。この君主は、物語作家リュスティシャン・ド・ピズに二つのすばらしい城を褒美として授けた。・・もつとも、このリュスティシャンとは誰なのか明確ではない」(Pauthier:lxvii-viii); *Encyclopedia Britannica*, IIa ed. XIV:「ルスティチャーノ・オヴ・ピーサ、長く英国のエドワード1世の宮廷にあった」(Benedetto:xvii-viii)。

24. 特にYule:58-63, Benedetto:xv-ix.

25. 以下エドワードに関しては主に、Prestwich:71-85. 同著者によれば、記録からするかぎり彼は文学には関心をもたず、作家のパトロンであったこともない。1300年以前の唯一の蔵書は、*Cretiens se voet eutremettre*で、もちろんルスティッケロの

ものではない。ただ、母親のエレノアはフランス・プロヴァンス宮廷の出身で、騎士物語の膨大なコレクションを有していた。一方王は、騎士道やアーサー王の故事には情熱をもち、1287年ウェールズ戦の後妃とともにGlastonburyを訪ねて、アーサーとグィネーヴルの墓とみなされるものを開いて二人の棺を発見し祭壇に埋葬し直した、とのこと。また、円卓の回復を宣言したり、1282年には由緒ある「アーサーの王冠」をウェールズから引き渡してもらい、それにより未来のエドワード2世がプリンス・オヴ・ウェールズとなった。王子が生まれるとまずコーンウォール（アーサー王の生地）公と名付けられ、成人するとプリンス・オヴ・ウェールズとなり、就位するとブリテン王となるという今も続くしきたりは彼に始まる（ディヴィッド・ディ『アーサー王の世界』原書房 1997 pp.147-51）。

26. この間の1271年2月6日国元より父重病の知らせが届き、同行していた従兄弟ヘンリー（父の弟アレマーニュ君主リチャードの子でコーンウォール公）を派遣したところ、ヘンリーは途中イタリア・ヴィテルボの、教皇選挙のため枢機卿たちが集まっていたサン・シルヴェストロ教会で、ギー・ド・モンフォールによってミサの最中に殺害された。シャルル・ダンジューの代理としてトスカナにあったギーが、イーヴシヤムの戦い(1265.8)で父のレスター伯シモン・ド・モンフォールを殺されたことに復讐したもの。エドワードは帰路オルヴィエートでその選挙で教皇グレゴリウス十世となっていたテバルドと出会い(1273.2.12)、ヘンリー暗殺の下手人ギーの出頭を求めたが、ギーは来ず破門された。

この出来事は大事件として当時の多くの書に記される。『神曲』ではギーは地獄界第7圏隣人に対する暴力者の中に挙げられる：「神の懐 [教会] にあってかの者は、タミージ [テムズ] の上になお慕われてある心臓を切り裂いた」(Dante:Inf. XII. 119-20)(ヘンリー王子の心臓は黄金の壺に入れてテムズ川に架かるロンドン橋の柱の上に置かれたという)。その他、Villani:II.7. capp. 37-9, pp.200-8, Pipinus:VI. 2. p.713.

27. Yule:59.

28. Yule:59-60.

29. Benedetto:xix-xxvi.

30. Critchley:5-8.

31. その他、考えられ得るルスティケッロとエドワードの関係としては、後者も参加した第7回十字軍のため、ピーサ共和国も1270年シャルル・ダンジューの要請でトゥニジアに艦隊を派遣している（ただしルイ9世の死とともに引き揚げたと言われる）。また、アークレには第1回十字軍後12世紀始めからピーサの商業植民地があった。

32. Ranieri Tempesti:Discorso accademico sull'istoria letteraria pisana, Pisa 1786 (Michieli:323-4).

33. Baldelli-Boni:I. ix. n. 4, Bartoli:lviii. n. 2.

34. Michieli:323.

35. デル・グエツラによれば、実際は1288年が最初(Del Guerra:14)。クリスティアーニによれば、1288.11-12, 1290.3-4, 1291-7-8 の3回(Cristiani:445)。Rustichelli家に関する記録は、Cristiani:470-1。それによると、Chello (giudice)は1314.7-8

にアンツィアーニになっている。

36. 1298年(9.8)クルツォラ海戦で捕虜になったとのラムージョの説は、その記録にマルコの名が全く現れないことと、同年に完成したという旅行記を書くまでの期間が余りにも短いことから疑問視され、一般には、ヤコポ・ダックィの言うごとく1294年ライアス沖ではないにしても、1296年頃どこかの海戦で捕虜になったのであろうと考えられている(cf. 拙訳<sup>1</sup>(1):94)。1284年(8.6)メローリア海戦の記録にも、ルスティケッロの名は出てこない(cf. 拙稿<sup>3</sup>(1):115-6)。

37. Benedetto:Review, *Giornale storico della letteratura italiana*, vol.88 1926. pp.121-7(Del Guerra:14-5).

38. Benedetto:xiv.

39. Del Guerra:20-33.

40. Del Guerra:66.

41. ピピーノの『年代記』*Chronicon Fratris Francisci Pipini Ordinis Praedicatorum*は、1176年以降の一部がMuratori:*Rerum Italicarum Scriptores*, vol. IX pp. 587-752(2欄組み)に収録されている(1724年モデナのエステ家図書館写本からの最初の出版)。編者ムラトーリの解説によれば、同書はフランク王国の起源から執筆の現在1314年にまで至る膨大なものだが、同版では前半が省略されている。その理由としてムラトーリは、新しいことは何も語られていないこと、典拠(アギナルド、ランドルフィ、ウォラギネ等)も全てお馴染みのものばかりであることを挙げる。一方、1176年以後を採録する理由として、その部分がもっぱらヴァンサン・ド・ボーヴェや「賞賛されたマルコ・ポーロの東方習俗の書」から文字どおり書き写されており、まだ一度も出版されたことがないことが挙げられている。

ムラトーリの版では、第1巻第1章「皇帝と教皇アレクサンデルの和約」つまりレニャーノの戦いで北伊都市同盟に敗れた神聖ローマ皇帝フェデリーコ1世とアレクサンデル3世の和約(1177年)に始まる(p. 587)。第2巻第43章は、1242年タルタル人がハンガリーとポーランドに侵入して破壊したこと(p. 672)。第3巻第26章「教皇グレゴリウス十世について」は、その主催になるリヨン公会議(1274年)にタルタル人使節が出席し洗礼を受けて自国に帰って行ったこと(p. 700)。同38-41章は「山の老人」についてで、「さまざまな歴史書からの要約」として詳述されるが、イギリス王エドワードも使者を装った暗殺者の一人に襲われたが逆に斬り殺したこと、1262年東方タルタル人の大王Alchui [フラグ、しかしアルグンとの混同か]によって征伐されたことなど(pp. 705-9)。第46章は、タルタル人君主Halau (フラグ)が1268年 [1258年] バグダードのカリフを倒し、塔に幽閉して黄金で飢え死にさせたことが、ほぼマルコの書 [ § 25 ] どおり記される(p. 710)。第47章は、タルタル人の王Magnus Cham Cublayが將軍Bajam Cingfan [百眼のバヤン] でもってマンジ地方を征服したこと、マンジ王Faofurが船で逃亡したのに対して妃はバヤンが「百眼」の意であることを知って投降したことなど、マルコの書 [ § 154 ] が要約される(p. 710-2)。第4巻第1-4章は、再びエドワードについて(pp. 713-4)。第14章は1272年フビライによるCarajamとVociam王国征服で、その戦争で象が使われたこと [マルコ § § 134-6] が紹介される(pp. 719-20)。第31章には、メ

ローリア海戦でのピーサの敗北が簡単に触れられるが、もちろんルスティケッロへの言及はない(p. 731)。第43章には、1294年リアス沖でのジェノヴァに対するヴェネツィアの敗北の記があるが、ヤコポ・ダックイとちがってマルコのことは出てこない(pp. 742-3)。そして第49章、1307年ハインリヒ7世の登位から1314年クレメンス5世の死をもって終わる(pp. 747-52)。

42. Marsden:xxi, xxix, xxxii-iv, liv-lxxx. マースデンは、パリ王立図書館に1300年頃のものと思われる極めて古いフランス語写本があるとの情報に接し、そのコピーを手に入れようとしたが得られなかったことを嘆いている(p. lxxviii-ix)。それがFのことか他の写本かは不明。

43. Apostolo Zeno:*Anntazioine alla Biblioteca dell'Eloquenza Italiana di Monsignore Giusto Fontanini*, Venezia 1753, tomo II. 同写本は現ベルリン国立図書館ハミルトン手稿ms. 424、15世紀のもの。かつてヴェネツィアのソランツォ家蔵書にあったことからかく呼ばれる。ベネデットによれば、FおよびZとよく一致し、したがって一フランク-イタリア語版のラテン訳からヴェネト語に訳されたものか、それともそれらの混交版。ラムージョに使われたことも確実(Benedetto:clxxiii-viii)。

44. Soc. Geo:Roux:Introduction:xliv-lii.

45. このラテン語テキスト(pp. 297-502)は後にベネデットによって、TAとPの入り混じったもの(LT)であることが明らかにされた(Benedetto:lxxxiv-v)。同テキストには例の「序文」があり、'Rustichelus'と明記されている(pp. 299-300. ただし1295年となっている)。「Glossaire」(503-30)と他に11の写本の人名・地名の対応表(pp. 534-52)がある。いずれも有益。

46. Baldelli-Boni:Testo del Milione:1. ただし、このMichele OrmanniはNicchol o Ormanniの誤りであることが、後にベネデットによって指摘された。また彼は、この書き込みが150年近くも後のものであることから、必ずしも信用できないとする(Benedetto:lxxxix)。ムールは、信用してよいと考える(Moule:41)。Ormanni家は、「神曲」にも登場するフィレンツェの古い貴族。

47. Baldelli-Boni:Storia del Milione:v-xviii, cxxiii-xxxi. ただしFについてはこの解説では論じられているが、それが出版されたときにはTAの校註がすでに終わっていたとみえて、テキストの対校には用いられていない。

48. バルデッリ・ボーニの判断では、アポストロ・ゼーノによって紹介されたヴェネツィア語ソランツィアーノ・テキストと地理学会ラテン語テキストもジェノヴァのフランス語版からの訳(p. xvi)。

49. 同図書館の1518年の蔵書目録にマルコ旅行記の一フランス語写本が挙げられており、そのタイトルは*Divisement du monde*となっている。ただしベネデットによれば、それはFG写本(fr. 5631)そのものを指すことも考えられる。また、1622年の目録には二つの*Devisement du monde*が登録されている。そのことからベネデットも、Fがプロワの王立図書館にあった「可能性は極めて高い」と見る(Benedetto:xii.n.1)。とすれば、バルデッリ-ボーニの推理の当たっている可能性も極めて高い。

50. Paris:244-54.

51. ピペーノの「序文」によると、彼がマルコの書をラテン語訳した動機は必ずしもそれだけではなく、何よりも宗教界、とりわけ東方布教を志す者たちの参考になるようにということと、イタリア語の分からない外国人も読むことができるようにするためであった(cf. 拙訳<sup>1</sup>(1):92-4)。

52. 同論文の最後にクラブロートKlaprothの書評があり、パリスの説を全面的に支持し、残る問題は、後の増補改訂版が誰か筆記者の助けを借りてマルコ自身によってやはりフランス語でなされたのか、それとも別の形でかを確認することだ、と指摘している(pp.252-4)。Parisは他に、Notice sur la relation originale de Marc Pol, 1833; Nouvelles recherches sur les premieres redaction du Voyage de Marco Polo, 1850; *Les Manuscrits Francais*, II-III, でもこの問題を取り上げているとのことであるが、未見。

53. Murray:xv-xxxviii.

54. Lazari:Prefazione:xxxii-lxiv.

55. Lazari:xxi. ラザリはその箇所を『元史』からとして引用しているが、巻・章等それ以上の説明はない。ウッドによれば、中国24の王朝史の索引に「孛羅」は21挙げられており、そのうち15が『元史』、4が金王朝史とのこと。ポーチェは、『元史』に雲南地方の枢密副使兼知事で1284年揚州の塩運司監督官として登場する孛羅をマルコとして「発見」した。その後ペリオによってこの「孛羅」(Polo, Polou, Bolou)は、モンゴル語名Bolodの漢訳であることが明らかにされ、否定された(cf. Wood:135-6, 栗野訳:171-3)。

56. Bartoli:Marco Polo:xxxviii-lx.

57. Pauthier:Introduction:lxxxii-xc.

58. Pauthier:Preface:1-2, Lazari:438.

59. コンスタンティノーブルのラテン帝国最後の皇帝ボードワン2世は、1261年帝国崩壊後、フランス王ルイ9世の弟でシチーリア王シャルル・ダンジューの保護の下に暮らしていた。地中海ローマ帝国の再建をもくろむシャルルは、自分の娘ベアトリスを彼の息子フィリップ・ド・クートニーと結婚させ、そこから生まれた子カトリーヌが名目上とはいえ東ローマ皇帝権の継承者となっていた。次のフランス王フィリップ4世の弟シャルル・ド・ヴァロワは、1301年そのカトリーヌと結婚し、旧帝国に対する妻の権利を主張した。そのため彼は、コンスタンティノーブルを再び征服すべくギリシヤに対する同盟を求めて、1305年使者としてティボー・ド・セボワをヴェネツィアに派遣していた。ティボーは1306年(12.14)ヴェネツィアと同盟を結ぶことに成功している(Yule:68-9, Critchley:38)。

当時フランス王フィリップ4世(1285-1314)と教皇クレメンス5世(1305-14)は新たな十字軍(実現しなかった「後の十字軍」)を計画し、ペルシヤのイル・カン国のモンゴル人との提携とキリスト教布教のために盛んに東方情報を集めていた。その教皇の命により、ポワティエにおいてハイトンが『東方史の華』を口述したのも、モンテ・コルヴィーノが中国に派遣されたのも、まさに同じ1307年のことであった。そうした状況から顧みて、ヴェネツィアにあったティボーがマルコたちのことを聞き知って、

東方情報を得るため写本一巻を所望した可能性は大いにある (cf. 拙訳<sup>2</sup>)。

60. Yule:Introduction:52-104.

61. Yule:79-80. ドージェ Marin Falier は、1355年4月15-17日 国家転覆の陰謀に失敗して斬首されたことで名高い。

62. Pelaez:5-32. ローマ・カサナテンセ図書館 ms. 3999.

63. Olivieri:Nota:273-83.

64. Benedetto:Introduzione:La tradizione manoscritta:ix-ccxxi, Il testo:1-243.

65. Benedetto:Cap.I.La redazione franco-iraliana(F):xi-xxxiii, 拙訳<sup>4</sup>.

66. ミラーノ・アンブロジーナ写本(1795年)は、後にムールによって出版されるセラダ写本の忠実なコピー。両写本間の異同については、L.F.Benedetto:Marco Polo:The Description of the World, by A.C.Moule and Paul Pelliot, 《*The Journal of the Royal Asiatic Society*》1939 pp.628-44, に検討されている。

67. Benedetto:Cap.VI.La fase anteriore a F:clxiii-cc.

68. Benedetto:xxvii.

69. Benedetto<sup>1</sup>:Proemio:xi-xxiv, 拙訳<sup>1</sup>(1):97-106.

70. Ricci:これはイタリア語版より早く1931年に原稿から出版されている；オキ：中国関係の註と文献解題において優れている。

71. フランプトン Frampton の英語版(1579年)は、サンタエリヤ Santaella のカステリヤ語版(1503年)の英訳。サンタエリヤ版はヴェネツィア語版(1496年)からの訳。同版には'micer Eustachio de Pisa, 1298, genoua'の語が見える(Santaella:fo.1)。

72. Penzer:xi-xxx. ラムージョ版テキストとコンティ旅行記を含む。

73. Orlandini:1-22.

74. Moule:The introduction:40-55. Hambis はこれの仏訳。

75. Allulli:Storia del Milione:xxxvii-lxiv.

76. Latham:Introduction:16-28.

77. Gallo:126-44.

78. Cf. Benedetto:CLXXIII-LXXXIII.

79. Borlandi:107-47.

80. トウッチは、この説を大胆すぎると批判する(Ugo Tucci:I primi viaggiatori e l'opera di Marco Polo, *Storia della Cultura Veneta*, Vicenza 1976, vol.I pp.633-70)。

81. Gallo:143-4.

82. この頃ヴェネツィアは西タルタリ(キプチャク・カン国、ノガイ)、ジェノヴァは東タルタリ(イル・カン国、アルグン)と結んで東方交易の主導権をめぐって激しく争っており、ヴェネツィアは1296年黒海のベラとカッフアやアナトリアのフォチエーアに大攻勢をかけ、それらの地域からジェノヴァ勢を駆逐しようとした。いまや大いに東方に通じ、ましてや帰路コカチン姫を送ってカーン・ガザンと面識のあるマルコは、最適の人物としてヴェネツィアの東方戦略に求められたことが想像される。

カーンからもらっていた黄金のパイザも大いにその役に立つはずだった (cf. Borlandi: 138-40)。

83. チックートもボルランディの説を支持する (Ciccuto:33)。

84. Ponchiroli(1954), Camesasca(1955)。

85. Benedetto:Cap. III. La piu antica riduzione toscana(TA):lxxx-xci.

86. Bertoruzzi-Pizzorusso:Prefazione:ix-xix, Nota al testo:325-49, Cardona: Indice ragionato:491-761.

87. ジェノヴァ-ヴェネツィアの和約は1299.5.25, 捕虜の解放は、ユールによれば夏頃。ジェノヴァ-ピーサの和約は1299.7.25(cf. 拙稿<sup>3</sup>(2):151-4)。

88. 編者Gabriella Ronchiの「テキスト解題」(pp.663-74)は、写本については全くベネデット説の紹介で、その説を別の方向から支持するTerraciniの系譜図を掲げているのみである。その後イタリアで出版されたテキストに、Marcello Ciccuto (TA<sup>1</sup>を主にF・R・Z等で補ったもの、1981)、Maria Bellonci (Fを基調とするイタリア語自由訳、1982)、Ruggero Ruggieri (TA<sup>1</sup>,1986)などがあるが、写本やテキストに関して新たな説は提示されていない。

89. Ronchi:Cesare Segre:Introduzione:xi-xxix. Fテキストに対するBenedetto版との読みの異なり(51箇所)の対応表:pp.675-87.

90. Critchley:1-68.

91. 'It is a great book of puzzles' (Yule:I.1).

92. Benedetto<sup>1</sup>:xix, 拙訳<sup>1</sup>(1):101.

93. 最近相次いで東西の研究者からマルコの旅を疑う説が提出されている。Francis Wood:*Did Marco Polo go to China?* London 1995 と杉山正明『モンゴル帝国の興亡』上・下 講談社 1996 (上 pp.15-21)。前者は、中国に関する記述が不正確で誤りの多いこと、茶・長城・漢字・纏足など重要な事項が欠落していること、伝聞や想像を事実のように記していることを根拠とする。後者は逆に、フビライの宮廷や元朝の社会についての記事が、とても一介の外からの旅人には伺い知れぬほど正確・詳細すぎることで、一方政府の役人であったにしては当時の中国の史書にもペルシャの史書にも一切その名が見えぬこと、を主根拠とする。後者の方が、解くに困難な問題提起であろう。両者とも、第三者の手になる資料(特にペルシャのもの)が用いられたと考える(ただし、どのようなものかは挙げられていない)。この問題についてクリッチリーは、ペルシャ文献にポーロの名が見えないのは、当時ヨーロッパとイル・カン国との間では対マムルークをめぐる頻りに使者がやり取りされており(ポーロ一家の東方行の発端も一面でその性格を帯びていた)、もはや特別のものではなくなっていたためであろう、と言う(Critchley:70)。ましてやマルコたちは中国人正使の従者か便乗を許されて帰国する商人にすぎなかった。マルコの旅を疑う両者は、当然ながら第三者の手になる資料(特にペルシャのもの)が用いられたと考える。ウッドが依拠しているHerbert Franke:Sino-Western contacts under the Mongol Empire, 《*Journal of the Hong Kong Branch of the Royal Asiatic Society*》 Vol.6 1966 pp.49-71も、ポーロの中国行を疑問視し、ペルシャ資料に基づいて書かれたものであろうとす

るが、元の時代に主に西方から中国に渡った人と物を挙げるだけで、それ以上のことは論じていない。

94. 最終章 § § 243-8のノガイとトクタイ（トクトウ・カン）の戦いは1298-99年、トクタイの再遠征は1303年。この戦いについては、ドーソンも『モンゴル帝国史』（佐口透訳注、東洋文庫 1979）の最後の補注で詳述している（第6巻pp. 395-407）。そこではヌワイリー「世界史」とラシード「集史」からの記事が引用されているが、マルコの記述はそれらとよく一致し、資料・典拠の観点から注目される。マルコの手書でも、取ってつけたように最後に付け加えられている（今では、誰かが後に書き加えたものであろうと、一般に認められている）。

95. 前述杉山は、グユクチ「早足」の指揮官の名が平然と挙げられていること（§ 104「ミンガンとバヤン兄弟」、猟犬の訓練担当者、杉山によれば「おそらく密偵も兼ねる特殊部隊の指揮官」）を例に挙げ、「大カアンのクビライの身边に付き従っている者でなければとうてい知ることはできない」とみなす（スキヤマ：上 17）。[しかし、マルコが実際にそうであったとしたらどうしていけないのであろうか。]

96. 中国の歴史に関しては、例えばアフマド事件など、ラシード・エッディーン『集史』らペルシャ文献と同じ誤りが見られること、かなりの地名がペルシャ語読みで、その綴りがよく一致することが知られる（cf. Wood:143-7, 栗野訳:181-6）。

97. 一例を挙げると、アフマド事件（106行）、フビライの宗教観（51行）、キンサイ市（230行）。

98. Benedetto:clxx-ii.

99. 例えば § 81（第89章）には、第一次東方行でグラン・カアンがニコロとマッテオを自分の使節として教皇のもとに派遣したいきさつが詳しく語られるが、この章はRにしか見られない（「序章 § 8」では簡単に触れられるのみ）。

100. Löseth:423-74. ルーゼスによれば、ルスティケッロの写本はパリ国立図書館には3本あり（Löseth:iii-iv）、ミキエーリによれば同図書館カタログでは次のごとくである。Ms. 1463（13世紀末）:Libre du Roy Meliadus de Leonnois, par Rusticiens de Pise; Ms. 340（14世紀初）:Abrege des Romans de la Table Ronde d'apres Lucas de Gast, Robert et Hekie de Barron, par R.P.; Ms. 355（14世紀）:Roman d'Artus - Giron le Courtois et Meliadus - Compilation de R.P.. 後半Palamedeについては計12の写本に見られる: Mss. 358-63（15世紀）:Roman de Guyron le Courtois, compile d'apres Helie de Borron et R.P.。他に、アルスナル図書館（3）、トリノー（3）、ヴェネツィア（2）、モデナ（2）、ロンドン（2）、フィレンツェ（1）などに計17数えられる（Michielli:329-34）。

Tassi版（1855）は、編者タッシによれば、フランス語原写本からの忠実なイタリア語訳でおそらく14世紀末の作。ルスティケッロの名をつけた後世の印刷本には、Antoine Verard（1501）、Galliot du Pre（1518）、Michele le Noir（1519）、Denis Janot（1532）、Clerge Royal（1534）などがある（Tassi:vii-xxi）。

101. Löseth:473-4.

102. 愛宕も、二人のヴェネツィア発を1270年末と計算する（オタギ:I. 374-51）。

103. Moule:23, Critchley:5-6, Muratori:Vita Gregorii Papae X:597-603.この教皇グレゴリウス10世について当時の書は、シリアでの任務の他に、1274年リヨンで公会議を主催したこと、そこにギリシャ人とタルタル人の代表団が参加し、ギリシャ人はローマ教会への統合を約束し、タルタル人は「洗礼を受けて自国に帰った」ことを伝えている。ピピーノ『年代記』にも記される(前述Pipinus:700)。当時のピーサ大司教Federigo Viscontiの説教の一つに「ピーサの教会へのタルタル人使節に答えて」と題したものがあり、この使節らは帰路ピーサに寄ったと見られる(cf. David Herlihy: *Pisa nel Duecento*, Pisa Nistri-Lischi 1990, pp. 59-60; 拙稿<sup>3</sup>(3):119)。

104. Prestwich:75-81, Critchley:69-70.

105. Prestwich:81. 最初ポーロ一行に同行した修道僧の一人グリェルモ・ダ・トリポリはシリアの名高いイスラム学者で、その著書は「巡礼テバルド」に捧げられている(Critchley:6)。

106. Latham:16.

107. クリッチリーによれば、エルサレム司教William of Agen (1270年4月の死までアークレ滞在)を誤ったもの(Critchley:6)。

108. 当時の多くの年代記に記される。Pipinus:714, Hayton:228(拙訳<sup>2</sup>(3):220)。

109. Cf. 拙稿<sup>3</sup>。

110. 他に1319年の記録にもう一人(おそらくその孫)その名が見られる(Branca:173-5, Cristiani:247 n. 52, 413)。ただしブランカもクリッチリーも、これも作者が自著を権威づけるためその名を借りたのではないかと疑っている。他に同じようなケースとして、「散文ランスロ」はヘンリー2世の要求によりゴーティエ・マップによって書かれたとする今日では否定される例がある(Branca:173-4, Critchley:8)。

111. Branca:13-27, Donadello:9-25. ルスティケッロはDonadello:356-524. Ms. 1463からとのこと。

112. Branca:17. C.E. Pickfordは自編 *Meliadus de Leonnoys*, London Scolar Press 1980 (National Library of Wales, Aberystwyth蔵写本のファクシミリ版)でまさにそのように推定している(Introduction:no pagination)。

113. ちなみにテバルドは教皇就任後、トスカナのゲルフィとギベッリーニを和解させようとして、フィレンツェ滞在中(1275年)ピーサの実力者だったウゴリーノ伯と接触している(拙稿<sup>3</sup>(1):114)。

114. Raimondo Morozzo della Rocca:Sulle orme di Polo, *L'Italia che scrive*, p. 120-2. ニコロとマッテオの妹フローラFloraの娘アウリアAuria(1301.12没)の夫はマルコ・ボルドゥMarco Borduといい、共にその家がマルコの館のあるサン・ジョヴァンニ・クリソストモSan Giovanni Crisostomo区にあったことから、このエレナ・ボルドゥElena Borduと何らかの姻戚関係が推定される。

115. Critchley:4. パリスは、14世紀半ばフランスにChristine de Piseの父親でThomas de Pisanなる学者のいたことを記す(Paris:251-2)。

116. D'Annunzio:*La Pisanelle*:591-841 (人名・地名はイタリア語読みに訳した)。この作品は十分にマルコの書を踏まえており、ファマグスタの港に着いた商品の中に

は、中国のナシチ（金椀子）、ザイトン（泉州）のサテン（縞子）、白いラクダ毛の織物、ボカッシン（綿織物）などが見られる(p.664)。また、ピサネッラは東方の君主のことを、「彼らの言葉でその大君はウン・カンと申します、フランス語でプレトル・ジャンのこと」と説明する(p.821)。

デル・グェッラによれば、このカタリーナのモデルは北岸西のポンテ区Rustichelli家の娘。同家は代々裕福な商人で、特にSimoneは1339年から5回同区のアンツィアーニ（長老）として記録に現れる。彼はまた、1356年イタリアに遠征してきた神聖ローマ皇帝カール4世がピーサに滞在したおり(1.18-6.14)、市に大金を供出したこと、カンポサント（斜塔隣の著名な墓地）に今もその墓(1363年)のあることが知られる(Del Guerra:34-9)。

117. D'Annunzio:755-6.

118. D'Annunzio:704.

119. エールは、ジェノヴァの貴族で天文学者・旅行家でもあり(1314年トレビゾンダ)、長くナポリのロベルト・ダンジューの宮廷に棲み、1334年そこで没した、またボッカッチョとも知り合いだったAndalò di Negroが獄中でマルコを手伝った可能性を指摘する(Heers:190-2)。

120. ポーロの東方行とヴェネツィア当局との無縁さが目につく。兄弟の一回目旅がまったく自発的なものであったにしても、三人による二回目の旅では、教皇の選出を待ったり修道僧をつけてもらったりと、もっぱら教会に頼っている。最初の帰国後ヴェネツィアで待機していた「2年間」の間に、彼らが市政府や商業界と接触しなかったとは考え難いが、それを東方交易を推進する恰好の機会として市当局が介入しようとした形跡はない。それとも、カタイやグラン・カンとの商売と名誉を独占するため、ポーロの方が秘密にしておこうとしたのであろうか。

121. Cf. 拙稿「マルコ・ポーロとダンテ -- その沈黙をめぐって」『池田廉教授停年退官記念論集』大阪外国語大学 1993 pp.45-64.

122. マルコの本についてもヴェネツィア当局との無縁さが印象づけられる。自国の生命線である東方に関する貴重な情報書として、市政府が統制しようとしたり逆に普及させようとした気配は感じられない。当時の旅行記は、カルピニ・ルブルク・ヘトゥム・オドリーコら全て国や教会が関わっている。ヴェネツィアでも、ルスティケッコと同じようにオイル語で書いたことでよく引き合いに出されるほぼ同じ頃のMartin da Canal:*Les Estoires de Venise* (1267-75)は市の公文書庁で作成されたし(A.Limen tani:Martin da Canal e <*Les Estoires de Venise*>, *Storia della Cultura Veneta*, Vicenza Neri Pozza 1976, I pp.590-601)、Marin Sanudo il Vecchio:*Liber Secretorum Fidelium Curcis* (1306)は1321年には教皇の命によって再編されている。これらがある種官製のものであったのに対して、マルコのそれが全く私的なものであったためか。それともやはり余りにも信じ難いとして、信用しなかったためか。あるいはすぐに知れ渡り、もはや介入のしようがなかったのか。いずれにしても、この最初のコントロールのなさが後のテキストの混乱につながっていることは否定できない。これらもマルコ・ポーロをめぐる謎の一つである。

## 【参考文献】

(テキスト：初版年代順)

1. Sessa: *Marco Polo da Veniesia de le meravegliose cose del Mondo*, per Zoanne Baptista da Sessa Milanese, Venezia 1496.
2. Santaella: *El libro del famoso Marco Polo veneciano de las cosas maravillosas*, Sevilla 1518 (Tenri Univ. 1973).
3. Novus Orbis: Marci Pauli Veneti De Regionibus Orientalibus, *Novus Orbis Regionum ac Insularum Veteribus Incognitarum*, pp.330-417, Basilea 1537 (1532).
4. Pagan: *Marco Polo Venetiano*, Venetia per Mathio Pagan (1555).
5. Ramusio: Giovanni Battista Ramusio: I viaggi di messer Marco Polo, gentiluomo veneziano, *Navigazioni e Viaggi*, a cura di Marica Milanese, Torino Einaudi 1980, vol.3 (1559).
6. Imberti: *Marco Polo Venetiano*, Venetia appresso Ghirardo & Iseppo Imberti 1626.
7. Müller: Andreas Mullerus: *Marchi Pauli Veneti, Historici fidelissimi juxta ac praestantissimi, de Regionibus Orientalibus*, Georgii Schulzii 1671.
8. Marsden: *The Travels of Marco Polo, a venetian, in the thirteenth century*, translated from the italian, with notes, by William Marsden, London 1818.
9. Soc. Geo.: Voyage de Marc Pol, *Recueil de Voyages et de Memoires*, par la Societe de Geographie, Tome I, Paris 1824.
10. Baldelli Boni: *Il Milione di Marco Polo*, a cura di Giovanni Battista Baldelli Boni, Firenze Da' Torchi di Giuseppe Pagani 1827.
11. Murray: *The Travels of Marco Polo*, greatly amended and enlarged by Hugh Murray, Edinburgh Oliver & Boyd 1844.
12. Lazari: Vincenzo Lazari: *I Viaggi di Marco Polo Venezino*, Venezia 1847.
13. Bartoli: Adolfo Bartoli: *I Viaggi di Marco Polo*, Firenze Le Monnier 1863.
14. Pauthier: *Le Livre de Marco Polo Citoyen de Venise*, par M.G.Pauthier, Paris 1865.
15. Yule: Henry Yule & Henri Cordier: *The Book of Ser Marco Polo*, 2 vols, Amsterdam Philo Press 1975 (London 1903-20).
16. Pelaez: M.Pelaez: Un nuovo testo veneto del *Milione* di Marco Polo, «*Studi Romanzi*» IV 1906, pp.5-65.
17. Marsden-Komroff: *The Travels of Marco Polo the Venetian*, revised

from Marsden's translation and edited with introduction by Manuel Komroff, Liveright 1982 (1926).

18. Benedetto: Luigi Foscolo Benedetto: *Il Milione*, Firenze Olschki 1928.

19. Penzer: *The most noble and famous travels of Marco Polo*, ed. by John Frampton, with Introduction by N.M. Penzer, London The Argonaut Press 1929.

20. Ricci: Aldo Ricci: *The Travels of Marco Polo*, London Routledge 1931.

21. Benedetto<sup>1</sup>: Luigi Foscolo Benedetto: *Il Libro di Messer Marco Polo Cittadino di Venezia detto Milione dove si raccontano le Meraviglie del Mondo*, Milano-Roma Treves-Treccani-Tumminelli 1932.

22. Moule: A.C. Moule & Paul Pelliot: *The Description of the World*, vol. I, New York AMS Press 1976 (London 1938).

23. Moule [Z]: Idem vol. II.

24. Allulli: *Marco Polo il Milione*, a cura di Ranieri Allulli, Milano Mondadori 1954.

25. Ponchioli: Daniele Ponchioli: *Il Libro di Marco Polo detto Milione*, Torino Einaudi 1982 (1854).

26. Hambis: Louis Hambis: *Le Divisement du Monde Le Libre des Merveil les*, Introduction et notes de Stephane Yerasimos, 2 vols, Paris Le Decouverte 1989 (Klincksieck 1955).

27. Latham: *Marco Polo The Travels*, tr. by Ronald Latham, Penguin Books 1958.

28. Bertolucci Pizzorusso: Valeria Bertolucci Pizzorusso: *Milione*, con Indice Ragionato di Giorgio R. Cardona, Milano Adelphi 1975.

29. 木村: 愛宕松男訳註『東方見聞録』2巻、平凡社 東洋文庫 1987(1978).

30. Ciccutto: Marcello Ciccutto: *Il Milione*, Milano Rizzori 1989 (1981).

31. Ronchi: *Marco Polo Milione - Le Divisament dou Monde*, a cura di Gabriella Ronchi, Milano Mondadori 1982.

32. Bellonci: *Marco Polo Il Milione*, scritto in Italiano da Maria Bellonci, Torino ERI 1982.

33. Ruggieri: *Marco Polo Il Milione*, a cura di Ruggero M. Ruggieri, Firenze Olschki 1986.

#### (研究書・論文・その他：著作年代順)

1. Di Benedetto: *La Leggenda di Tristano*, a cura di Luigi Di Benedetto, Bari Laterza 1942. [13世紀末]

2. Hayton: *La Flor des Estoires de la Terre d'Orient*, in Recueil des

- Historiens des Croisades, Documents Armeniens, ed. C.Kohler, Paris 1906. [1307]
3. Dante: *La Divina Commedia*, a cura di Tommaso di Salvo, Bologna Zanichelli 1985. [ca.1310-20]
  4. Pipinus: Franciscus Pipinus: *Chronicon*, in (8) pp.588-752. [ca.1314-20]
  5. Pegolotti: F. Balducci Pegolotti: *La Pratica della Mercatura*, ed. by A.Evans, Cambridge The Medieval Academy of America 1936. [1340]
  6. Villani: *Cronica*, Roma Multigrafica Editrice 1980. [ca.1320-48]
  7. Donadello: *Il Libro di Messer Tristano* ( *«Tristano Veneto»* ), a cura di Aulo Donadello, Venezia Marsilio 1994. [14世紀末]
  8. Muratori: *Rerum Italicarum Scriptores*, IX, 1724.
  9. Paris: Paulin Paris:D'une notice sur la relation originale de Marc-Pol, Venetien, *«Nouveau Journal Asiatique»* Septembre 1833 pp.244-54.
  10. Tassi: Francesco Tassi:*Girone il Cortese*, Firenze Societa Tipografica sulle Logge del Grano 1855.
  11. Loseth: Eilert Loseth:*Le Roman en Prose de Tristan - Le roman de Palamede et la compilation de Rusticien de Pise*, Slatkine Reprints Geneva 1974. [1890]
  12. D'Annunzio: Gabriele D'Annunzio:*La Pisanelle*, Milano Mondadori 1980. [1913]
  13. Michieli: A.A.Michieli:Chi fu e che cosa fece Rusticiano da Pisa, *«Atti del Reale Istituto Veneto di Scienze, Lettere ed Arti»* LXXXIV 1924-25 pp.321-37.
  14. Orlandini: G.Orlandini:Marco Polo e la sua famiglia, *«Archivio Veneto-Tridentino»* IX 1926 pp.1-68.
  15. Scognamiglio: Gioacchino Scognamiglio, Saggio di bibliografia poliana, *«L'Italia che Scrive»* XXXVII-10 Ottobre 1954, pp.143-48.
  16. Del Guerra: Giorgio del Guerra:*Rustichello da Pisa*, Pisa Nistri-Lischi 1955.
  17. Gallo: Rodolfo Gallo:Marco Polo la sua famiglia e il suo libro, *Nel VII centenario della nascita di Marco Polo*, 1955, pp.63-193.
  18. Olschki: Leonardo Olschki:*L'Asia di Marco Polo*, Firenze Sansoni 1957.
  19. *Oriente Poliano*, Roma Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente 1957.
  20. Gallo<sup>1</sup>: Rodolfo Gallo:Nuovi documenti riguardanti Marco Polo e la sua Famiglia, *«Atti dell'Istituto Veneto di Scienze, Lettere ed Arti»* CXVI 1957-58 pp.309-25.

21. Pelliot: Paul Pelliot: *Note on Marco Polo*, Paris 1959.
22. Borlandi: Franco Borlandi: *Alle origini del Libro di Marco Polo, Studi in Onore di Amintoni Fanfani* vol. I, Milano 1962 pp.105-47.
23. Cristiani: Emilio Cristiani: *Nobiltà e Popolo nel Comune di Pisa*, Napoli Istituto Italiano per gli Studi Storici 1962.
24. Branca: Daniela Branca: *I romanzi italiani di Tristano e la Tavola Ritonda*, Firenze Olschki 1968.
26. Heers: Jacques Heers: *Marco Polo*, Paris Fayard 1983.
26. Watanabe: Hiroshi Watanabe: *Marco Polo Bibliography 1477-1983* (『マルコ・ポーロ書誌』), Tokyo The Toyo Bunko 1986.
27. Prestwich: Michael Prestwich: *Edward I*, London Yale Univ. Press 1997 (1988).
28. 『フランス中世文学集』(新倉・神沢・天沢訳) 4巻、白水社 1994(1990).
29. Critchley: John Critchley: *Marco Polo's Book*, Hampshire Variorum 1992.
30. Wood: Frances Wood: *Did Marco Polo go to China?* London Secker & Warburg 1995 (栗野真紀子訳『マルコ・ポーロは本当に中国へ行ったのか』草思社 1997).
31. スギヤマ: 杉山正明『モンゴル帝国の興亡』2巻 講談社 1996.
32. 拙稿<sup>1</sup>: 「ジパングの系譜」(1)《愛媛大学教養部紀要》21 1988, (2)同23 1990, (3)《大阪国際女子大学紀要》23-1 1997.
33. 拙稿<sup>2</sup>・拙訳<sup>1</sup>: 「ラムージョ: マルコ・ポーロの書序文」《愛媛大学教養部紀要》24 1991, (2)《帝国学園紀要》18 1992, (3)《大阪国際女子大学紀要》19 1993.
34. 拙稿<sup>3</sup>: 「中世ピーサ年代記 -- 12-14世紀を中心に」(1)《大阪国際女子大学紀要》23-2 1997, (2)同24-1 1998.
35. 拙訳<sup>2</sup>: 「ハイトン『東方史の華』」(1)《大阪国際女子大学紀要》20 1994, (2)同20-2 1994, (3)同21-1 1995.
36. 拙訳<sup>3</sup>: 「ラムージョ版『マルコ・ポーロ旅行記』」(1)《大阪国際女子大学紀要》23-1 1997, (2)同23-2 1997, (3)同24-1 1998.
37. 拙訳<sup>4</sup>: 「ベネデット: マルコ・ポーロ写本研究」(1)《大阪国際女子大学紀要》24-2 1998.



図V-3 ピーサ・サンタ・カテリーナ教会 (c. 1220)



図V-4 メローリアの海戦 Armaino画 (年代・出典不明、Wikipediaより)

En romain l'histoire de meliadus  
 de cyron le courtois et du d'he  
 l'as pas. Et pie p'ncipalment le  
 q'le m'flata de branos le beau le di  
 el d'he q' auoit pl' de ce as d'ange  
 le q' vint ala cour du roy artus  
 ampaigne d'ic d'auo'le auo'  
 luy q' enuoye lo' u'it' ala cour  
 pour l'auoir sit y auoit nul  
 ch'is q' u'ist' iouant. Et co



**E**l'ignours qu'on  
 v'is p'ces d'ic d'as  
 d'as v'ic'os. tout  
 d'as tous les p'ci  
 d'ignours de c'estuy mode q' auo'  
 r'ales t' d'ic de v'os d'ic'et en  
 romain p'ces c'estuy ay: et le  
 f'aires l'ure de d'ic'et en ch'ef  
 li'ores: tout'z les q' d'ic'et ad'ic'  
 t'uez q' ad'ic'ent e'ce les  
 d'ic'et d'ic'et du t'eps au roy d'ic'  
 p'rid'ag' d'ic'et nul'ques au t'eps  
 au roy artus. son filz et des  
 comp'aignons de la table r'ale.  
 Et sachez tout v'ic'ement  
 q' c'estuy liure fut e'crite  
 du liure mon' d'ic'et le roy  
 d'ic'et en c'eluy t'eps q'  
 il passa outre la mer au l'eu  
 que n'ic'et le liure pour auo'  
 que l'ic'et le liure l'eu d'ic'et  
 Et m'ist'ic'et d'ic'et de p'ic'  
 comp'ila ce romain. Car  
 il t'ransl'at' toutes les mer  
 u'elles: et ad'ic'ent  
 qui t'rouua en c'estuy liure  
 Et t'ant tout certain  
 ment de toutes les g'and'  
 ad'ic'ent: du monde. Et  
 sachez q' il t'ransl'at' plus  
 de mon' d'ic'et l'anc'et  
 du liure de mon' d'ic'et  
 t'ransl'at' le filz au roy melia  
 dus de leonans que d'ic'et  
 poua que il f'ic'et sans  
 f'ic'et les meilleurs cheu  
 l'as qui au t'eps v'ic'et  
 et le m'ist'ic'et en d'ic'et

ment il ad'ic'et le liure et  
 xiii' t'eps t'ous les d'ic'et de  
 la table r'ale de coup de lance  
 d'ic'et plusieurs d'ic'et qui f'ic'et  
 entre f'ic'et que len t'rouua  
 d'ic'et en c'estuy liure: et  
 aussi d'ic'et de l'ours f'ic'et de  
 quoy n'ic'et nulle m'ic'et que  
 c'estuy liure. Et m'ic'et  
 m'ic'et le m'ist'ic'et du

ne m'ic'et ad'ic'ent  
 qui t'ad'ic'et au roy ar  
 tus par v'ic'et t'ous de p'ic'  
 t'ous en la ville de k'ama  
 lot.

**C**omment le v'ic'et cheualier  
 ioua a mon' d'ic'et l'anc'et  
 d'ic'et du lac. mon' d'ic'et  
 t'ransl'at' de leonans et mon  
 seigneur g'ar'ic'et mon  
 seigneur p'ic'et et au roy  
 artus et a tous ceulx de la  
 table r'ale et les abb'at'  
 t'ous de coup de lance sans  
 soy rem'ic'et du d'ic'et.

**D**ic'et partie  
 d'ic'et le comp'ic'  
 t'ans comme la  
 v'ic'et l'ic'et  
 le t'ransl'at' que  
 mon' d'ic'et le roy ar  
 tus e'c'et a k'ama lot en  
 g'ant comp'ic'et de gens  
 de roy. et de barons. Et  
 sachez certainment qui  
 y auoit c'eluy pour m'ic'  
 p'ic'et et p'ic'et  
 de comp'ic'et de la table  
 r'ale. et t'ous en no'ic'et  
 d'ic'et d'ic'et. Et  
 d'ic'et qui y auoit le roy  
 l'anc'et le roy d'ic'et le  
 roy de le'ic'et m'ic'et le  
 roy de no'ic'et. le roy d'ic'  
 t'ous m'ic'et de g'alo'ic'et  
 le roy d'ic'et et t'ous d'ic'  
 d'ic'et que bien y f'ic'et q'ic'  
 t'ous t'ous: q' d'ic'et y e'

coient mon' d'ic'et l'anc'  
 lot du lac. et mon' d'ic'et  
 t'ransl'at' de leonans et mon  
 seigneur g'ar'ic'et le v'ic'  
 v'ic'et au roy artus et mon  
 seigneur p'ic'et le p'ic'  
 l'anc'et d'ic'et et mon' d'ic'  
 seigneur l'anc'et de g'alo'ic'et  
 t'ous m'ic'et g'ant court  
 et g'ant f'ic'et. Et sachez  
 que il e'c'et le g'ant de la p'  
 t'ous. Et quant il e'c'  
 v'ic'et d'ic'et et que les ta  
 bles f'ic'et. D'ic'et t'ant  
 f'ic'et d'ic'et le p'ic'  
 v'ic'et cheualier t'ous de t'ous  
 t'ous: et e'c'et m'ic'et  
 g'ant de son corps. Et  
 sachez que il e'c'et si cor  
 l'ic'et que pou l'ic'et qui  
 n'ic'et g'ant. Le cheual'  
 et t'ous d'ic'et v'ic'et  
 m'ic'et t'ous t'ous  
 si d'ic'et d'ic'et  
 d'ic'et que la d'ic'et e'c'et  
 v'ic'et de v'ic'et d'ic'et  
 et en son d'ic'et auoit  
 v'ic'et d'ic'et d'ic'et de p'ic'  
 t'ous p'ic'et et e'c'et m'ic'  
 t'ous sur v'ic'et p'ic'et  
 qui e'c'et t'ous d'ic'et  
 t'ous t'ous d'ic'et  
 d'ic'et d'ic'et. Et il n'ic'  
 t'ous pas d'ic'et  
 mais d'ic'et. Le d'ic'  
 t'ous auoit aussi en la  
 comp'ic'et d'ic'et  
 d'ic'et d'ic'et  
 et l'anc'et long t'ous.

**Q**uant le cheualier  
 fut d'ic'et d'ic'et  
 le p'ic'et en t'ous  
 m'ic'et comme t'ous a  
 t'ous d'ic'et il n'ic'  
 g'antment qui t'ous  
 v'ic'et d'ic'et et m'ic'  
 au roy artus t'ous  
 t'ous comme d'ic'et  
 t'ous t'ous le liure  
 auoit charge le t'ous  
 que len t'ous t'ous  
 en la m'ic'et t'ous  
 ou le roy artus e'c'et  
 t'ous comp'ic'et  
 t'ous t'ous t'ous  
 auoit charge le t'ous  
 d'ic'et le roy artus et

393

6978



图 V-5 L'Ystoire de Meliadus et de Gyron le Courtois de Rusticien de Pise  
 (BNF fr. 355, f. 1r)